

松 山 大 学 論 集
第 29 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 1 7 年 6 月 発 行

松山大学の歴史と創立の三恩人・
校訓「三実主義」について

川 東 淸 弘

松山大学の歴史と創立の三恩人・ 校訓「三実主義」について

川 東 埤 弘

目 次

序 論

第1章 『学生便覧』の「松山大学のあゆみ」（歴史年表）について

第1節 『学生便覧』の「松山大学のあゆみ」（歴史年表）の問題点

第2節 「松山大学のあゆみ」（歴史年表）の試案

第2章 創立の三恩人について

第1節 創立の三恩人の銅像の場所と紹介文の問題点

第2節 創立の三恩人のプロフィール試案

第3章 校訓「三実主義」について

第1節 校訓「三実主義」の歴史の変遷と問題点

第2節 校訓「三実主義」試案

序 論

松山大学は毎年入学する新入生に対し、『学生便覧』を配布している。その中に、大学の紹介がなされ、「目的と使命」、「松山大学の沿革」、「松山大学のあゆみ」、「創立の三恩人」（新田長次郎，加藤恒忠，加藤彰廉）のプロフィールの紹介，本学の教育方針・人間形成の原理である校訓「三実主義」の説明等

がなされている。それをあらためてよく見てみると、現時点ではいくつかの問題点が見られるのである。

まず、「松山大学のあゆみ」（歴史年表）については、学生の目線にたったわかりやすい年表になっていないこと、また、学校の歴史にとって重要な史実と必ずしもそうでない史実が混在し煩雑になっていること、さらに、校史にとって重要な事項が見落とされていること、さらにまた、学校にとって不都合な真実が触れられていないことなど、いくつかの問題点が見られるのである。

また、「創立の三恩人」についても、その紹介文は出自、学歴、人格形成等にややバランスに欠け、また松山高商創立にあたり両加藤（加藤恒忠と加藤彰廉）の関係について史実確認が不十分と思われる諸点もあり、訂正し、正確さを期す必要があると思う。

さらに本校の校訓「三実主義」については歴史があり、最も重要な田中忠夫校長の「三実主義」の定義の明文化の時期が記されておらず、また、戦後星野通学長が「三実主義」を再興し、田中忠夫の定義を簡略・簡明化し、現在まで50余年の長きにわたって使用されているのに何の指摘もないことなど、いくつかの問題がある。

以下、第1章で『学生便覧』の「松山大学のあゆみ」（歴史年表）の種々の問題点を明らかにし、私の試案を述べたい。第2章で「創立の三恩人」について、その胸像に歴史があり、その設置場所については何度か移設され、今日では記憶から薄れているので、設置場所の変遷について考察し、また、三恩人の紹介文にも歴史があり、その問題点も明らかにし、私の試案を述べたい。最後に第3章で校訓「三実主義」の歴史的変遷と問題点を明らかにし、私の試案を述べることにする。

第1章 『学生便覧』の「松山大学のあゆみ」（歴史年表）について

第1節 『学生便覧』の「松山大学のあゆみ」（歴史年表）の問題点

第1に、年表には設立者の新田長次郎や校長、学長の人物名が一切出ていないのである。歴史は人がつくるものであり、年表において、人が登場しないのは問題で、顔の見えない年表となっている。

①まず最も重要な本校の設立者である新田長次郎の名は出すべきであろう。長次郎抜きに本校は存在し得ないからである。

②また、校長・学長については少なくとも初代校長の加藤彰廉、「中興の祖」と言われる第3代校長の田中忠夫、松山経済専門学校を松山商科大学に昇格させた伊藤秀夫校長（初代学長）や新学部を設置に尽力し学校の発展に多大な貢献をした学長等については記すべきであろう。学校の発展については、学部の新設が最も苦勞し、重要であるからである。

第2に、年表では本校の最も重要な教育方針・人間形成の原理である校訓「三実主義」について重大な不備・欠陥が見られることである。

①年表では1926（大正15）年3月の「第1回卒業式で校訓『三実主義』宣言」と記されているが、正確には校訓「三実」の宣言であり（翌年から「三実主義」といわれるようになった）、また、誰が宣言したのか、さらにその「三実」の順序（実用・忠実・真実）が記されていない。

②また、第3代校長の田中忠夫が1941（昭和16）年4月に校訓「三実主義」の定義を明文化し、順序を変えた（真実・実用・忠実）にもかかわらず、その重要な史実が記されていない。これは重大な不備・欠陥である。

③戦後松山商科大学の2代目学長に就任した星野通が1957（昭和32）年就任挨拶の中で、加藤彰廉、田中忠夫の「三実主義」を再吟味、再認識し、順序を変えたこと（真実・忠実・実用）、そして、1962（昭和37）年4月に田中校長の明文化した定義を2行程度に簡略・簡明化し、その定義が現在まで50余年にわたり引き継がれているにもかかわらず年表に記されていないことも不備・

欠陥である。

第3に、年表には戦前の学校の「負の歴史」について一切触れられていないことである。

特に戦前本校の最大の不祥事であった第2代渡部善次郎校長拉致事件のことが記されていない。渡部教授は創立以来の古参の有力教授であったが、晩年の1933（昭和8）年4月病気で退職していた。ところが、同年9月加藤彰廉校長が死去し、次期校長選任において、理事の井上要が病気退職中の善次郎を担ぎだし、同年10月第2代校長兼専務理事に据えた。その際、渡部校長就任に異議を述べたのが古参の教授・佐伯光雄であった。渡部校長は翌1934年3月31日、遺恨があったのだろう、佐伯教授を突如解雇した。それに反発した佐伯教授の教え子が同年5月渡部校長をピストルで脅し、瀬戸内海の小島に拉致監禁し、辞職を強要した。この事件は全国的に報道され、本校の社会的信用を大きく失墜させることになった。この史実は不祥事であっても、校史に記すべきであろう。というのは、雨降って地固まるの如く、この不祥事の後、次期校長選任において、理事会が教授会の意向を尊重することになり、第3代校長に田中忠夫が選出されたからである。その意味でこの事件は、教授会の自治権が確立する契機となったのであり、是非とも触れなければならない校史である。

第4に、年表には戦時下の学校の負の歴史（軍国主義・全体主義への迎合・屈伏の歴史）が全く触れられていないことである。いくつか列挙しよう。

① 1934（昭和9）年に第3代校長に就任した田中忠夫は、「日本一の高商に」という壮大なスローガンを掲げ、加藤彰廉時代と異なり、拡張路線をとり、「中興の祖」といわれるが、日中戦争前後から田中校長の時局迎合が始まり、とりわけ1941（昭和16）年4月からは時局に全く迎合し、「東亜科」を設置した。同科は中国語を必修とし、大東亜共栄圏形成のリーダーを養成するためのものであったが、年表には触れられていない。

② 1941（昭和16）年からは、卒業年月の切り上げが行なわれた。41年度の卒業式が42年3月でなく、41年12月に3カ月繰り上げられ、42年度の卒業

式は43年3月でなく、42年9月に6カ月繰り上げ、43年度の卒業式も44年3月でなく、43年9月に6カ月繰り上げられた。さらに、11月には学徒出陣で2年生の一部が仮卒業し、出陣した。44年度も45年3月でなく、44年9月に6カ月繰り上げ卒業となった。

要するに、学業を早く切り上げ卒業させ、生徒を勤労、出征に駆り立てるためであった。そして、少なからず生命を落とした。国策とはいえ、本校も従わざるをえなかったが、年表には記されていない。

③また、この時代、思想統制が強化され、学問の自由・思想の自由がなくなり、本校の有能な2人の教授が退職させられた。すなわち、1942年7月に住谷悦治教授が「左翼教授」だとして、1944年11月には古川洋三教授が「自由主義者」だとして退職を余儀なくされたが、やはり年表に記されていない。

④1943（昭和18）年の金属回収令により、三恩人（新田長次郎、加藤拓川、加藤彰廉）の胸像が供出させられたことが記されていない。三恩人の胸像の撤去とは学園にとって極めて屈辱的事実である。

⑤また、年表には戦時下の1944（昭和19）年に福知山高商を吸収合併し、松山経済専門学校に校名変更した深い真相が読み取れないことである。年表には1944年2月「福知山高商業学校を吸収合併」とか、3月「松山経済専門学校に名称変更認可」との記述があるが、吸収合併・校名変更の背景に、戦時体制下東条内閣による文系・商科系縮小政策があったためである。

すなわち、1944年1月、東条内閣・文部省は文系は戦争に役立たないとして廃止または定員半減することを明らかにした。その結果、本校は定員600名を300名に縮小することになったが、福知山高商の定員300名を吸収することによって600名体制を維持し切り抜けることができた。

しかし、その際、福知山の生徒のみ引き受け、教職員は引き受けない、理事ポストの要求も拒否するが、その代わり移籍生徒の授業料全部を福知山財団に還付するという、多大の財政的犠牲を払った上での吸収合併であった。そして、4月1日、松山経済専門学校に校名を変更し、田中忠夫が初代校長になっ

たのである。この深い真相が年表からは読み取れない。

⑥また、戦時下在學生には勤労働員が命ぜられた。生徒は授業よりも勤労働員に駆り立てられた。勤労働員は、1941年10月6日、2年生約90名が広島兵器補給廠に動員されたのが始まりであり、1944年に入ると、授業はほとんど行なわれなくなった。生徒は各地の勤労働員に駆り出されたのである。学園の機能崩壊であった。1944(昭和19)年4月に入学した1年生の神森智氏(後、学長に就任)の回顧を紹介しよう。

「4月に入学してから、吉田浜の飛行場(今の松山空港)、あれは海軍の飛行場だったのですが、そこで堰堤を作る。コの字型に土を盛って土手を作る作業に行きましたね。そこに飛行機を入れると、三方から爆弾が落ちても護られる。そういう堰堤を作る作業に駆り出されました。何回も何回も行きましたね」

「昭和19年の初めての夏休みの直前には、兵庫県の三木という所、加古川から入るのですが、そこの飛行場を作る作業に行きました。1週間の泊まり込みで、それから現地解散して夏休み。夏休みが済んだらもう一遍ここに来い、つまり現地集合。9月の初めにまた三木に行って、飛行場の建設作業をしました。今だったらブルドーザーがありますが、あの頃は建設機械などはありません。人間がモッコで土運びをするのです。原始的ですね。そういう作業をしました」

「それ(筆者注:三木飛行場)から松山に帰ってきて、少し授業があったら10月からは通年動員。政府の『学徒勤労働員通年実施』の決定に従ったのです。私たちのクラスは新居浜に行きました。住友機械という工場です。私は1組だったのですが、2組は波止浜の造船所に行きました。3・4組は名古屋の飛行場(注、名古屋熱田愛知航空機)に行きました。また、一級上の2年生は長崎の造船所に行きました。3年生は9月に繰り上げ卒業したのでいません。ですから昭和19年の10月からは学校は空っぽで

す。市内の自宅通学生からなる防護班，20人くらいでしたか，それを除いて生徒はいない」¹⁾

1945（昭和20）年になると，3月18日，政府は閣議決定で「決戦教育措置要綱」を決め，これにより，4月1日より1年間学校の授業が停止された。45年度の新入生の入学式が7月5日に行なわれたが，授業は停止されたままで，1年生は入学後，1時間の授業も受けることなく，7月10日，西条方面に軍用道路建設工事に動員された（敗戦まで）。

以上のように，戦時体制下の学校は学園でなくなっており，その実態が年表には全く触れられていない。

第5に，1945（昭和20）年7月26日，松山市が大空襲に襲われ，本校も大被害を受けたが，そのことが年表には全く記されていない。

この松山大空襲で松山市が焼け野原となり，本校の鉄筋の本館，図書館及び加藤会館，また，木造ながら有師寮，学生会館は焼け残ったが，木造校舎の2号館，3号館，4号館，武道館が焼失した。田中校長が「日本一の高商に」という壮大なスローガンの下，拡張建設した校舎が灰塵に帰したのである。これは学校の物理的崩壊という重大事である。また，中一万の田中校長宅も被災し，佐伯光雄夫妻も犠牲となった。このように，本校の歴史にとって悲劇ともいえる重大事件が年表に記されていないのは全く問題である。

第6に，年表には松山高等商業学校設立以前の史実が触れられていない。

私立松山高等商業学校は，四国に帝国大学を，そして愛媛・松山の地に誘致すべく，1921（大正10）年12月3，4日，松高教授北川淳一郎が『海南新聞』紙上に「私立高等商業学校設立私案（上・下）」を発表したことが発端である。そして，同年冬，北川が伊予教育義会会長の井上要に高商設立案を話し，井上要が1922（大正11）年の正月，東京から帰郷していた加藤拓川（貴族院議員）

1) 神森智「自分史と松山商大時代を語る」松山大学コミュニティカレッジ 2012年度秋期特別講座「松山大学90年史話」2012年11月1日。

に高商設立案を話し、その拓川が北予中学校長の加藤彰廉に話し、設立計画が進んだのである。そして、同年9月14日に松山の政界、経済界、教育界の主要人物が集まり、設立総会を開き、高商の設置計画を決め、設置委員8名を選出した。

設置計画の概要は1学年定員50名、修業年限3年、総定員150名。創立費12万円、留学費3万円、経常費3万円であった。創立費12万円の内、県に7万円、市に3万円の補助金を申請し、残りは民間からの寄附金（郷土出身の大阪の実業家・新田長次郎等）で賄うことを決めた。だが、その後、愛媛県が緊縮財政のため補助金の支出を断り、また、文部省から30万円の基本金積み立てを要求され、高商設立は頓挫の危機に陥った。その時、加藤拓川が新田長次郎に働きかけ、長次郎が県の補助金及び基本金30万円の全額引き受けを了解し、財政問題がクリアされ、加藤彰廉が文部省に対し、1922年12月26日、松山高商の設置申請を行ない、翌1923(大正12)年2月22日、認可を受けた。そして、同年3月3日、第1回理事会を開き、役員を選任し、彰廉が校長兼専務理事に推挙され、同年4月1日、松山高商が開設された。そして、4月14、15日入試を行ない、25日入学式という運びになった。このように、1923年4月の松山高商設立に至る熱い前史が記されていないのが問題である。

第7に、年表には敗戦、戦後の学校復興、授業再開、教職追放等のことも一切記されていない。

8月15日を境に日本は大きく変わった。戦前の軍国主義への反省の下に、新生日本、平和国家、民主国家、文化国家日本の建設に歩み始めた。また、国家主義・軍国主義教員の公職・教職追放がなされた。本校も例外でない。教職追放に田中校長と浜田喜代五郎教授が該当し、追放された。この史実を記さないのは問題である。不都合な事実であっても、記すべきであろう。

第8に、年表は何が重要で、何がそうでないのかが不明で、大変煩雑なことである。

①まず、新学部や大学院の設置認可の月が多く記されているが、学生の目線

に立つならば、設置認可月ではなく、開校月にした方が親切であろう。

②国内外の大学、企業、自治体等との交流協定について事細かく記されているが、煩雑であり、別表に記した方が良い。

③年表には戦後の建物・設備の竣工についても多く記されているが、校舎については1988（昭和63）年の7号館竣工以降は記されているが、それ以前の建物が触れられていなくて、アンバランスである。

ちなみに、それ以前を追加すると、1948年に2号館（旧）、4号館（旧）、52年に5号館（旧）、53年に講堂兼教室、59年に図書館（旧）、62年に3号館、65年に研究センター、1966年に2号館、1969年に新本館（現1号館）と6号館、研究センターの増築（西側に接続して2階建）、1974年に4号館、1976年に50年記念館（新図書館）、1981年に本館（1924年、1969年につぐ新々本館）と5号館を竣工した。そして、1988年に7号館、1991年に8号館、1993年に東本館、1994年にカルフル（食堂等）、1996年図書館増築、1999年温山会館、2006年9号館、2016年樋又キャンパス竣工と続いている。なお、2017年から正門に入ってすぐ右の2階建の大学院建物、研究センター、6号館、そして歴史ある1号館の解体が始まった。

第9に、年表には建物・設備充実の背景としての定員の増加について、開校時の定員（1学年50名）が触れられているだけで、その後の新設学部の新定員やその増加・発展ぶりが一切触れられていないことである。

学校の発展・拡大ぶりについては学部の開設およびその定員の増大が最も重要であるので、それとの関連で建物・設備の建設状況を見ておこう²⁾

①加藤彰廉校長時代（1923年3月～1933年9月）

1923（大正12）年4月、松山高商は1学年50名、総定員150名で出発した。

2) 定員や建物については、『松山大学五十年史』（昭和49年3月）、『松山商科大学六十年史（資料編）』（昭和60年6月）、『松山大学九十年の略史』（平成25年10月）等を参照した。

そしてそのための校舎として翌年4月本館（松山初の鉄筋4階建，23室，549坪）を竣工させた。

3年目の1925（大正14）年4月から，志願者増のため，総定員250名（1学年80余名）に増大させた。そして，1928（昭和3）年8月には講堂・図書館を竣工させた（鉄筋4階建，256坪，1階が図書館，2，3階が講堂）。

8年目の1931（昭和6）年4月から，志願者増のため，1学年100名，総定員300名体制とした。

②第2代渡部善次郎校長時代（1933年10月～1934年5月）

志願者が増大していたので，定員を1学年100名から150名に増やす検討がなされている。

③第3代田中忠夫校長時代（1934年10月～1947年2月）

渡部善次郎校長が不祥事件の責任をとり辞任し，その後就任したのが田中忠夫である。

田中校長は「日本一の高商に」というスローガンの下に拡大路線を進め，定員，校地，校舎等の設備拡大，教員の増員，学園の美化等に邁進した。

1937（昭和12）年4月には木子七郎設計の加藤会館（生徒会館，鉄筋3階建，197坪）を竣工させた。

1938（昭和13）年4月には定員を1学年150名，総定員450名に増やした。そのために，新校舎として1939（昭和14）年3月に木造の2号館（2階建，234坪）を竣工させた。

さらに，1941（昭和16）年4月から1学年200名，総定員600名体制とし，彰廉時代より倍加させた。そのために，新校舎として同年5月に木造の3号館（2階建，150坪），さらに42年3月に木造の4号館（平屋建，162坪）を竣工させた。また，43年3月に武道場を完成した。

そして，田中校長は1943（昭和18）年5月15日に校舎，校地の拡張・増築の完成を祝すると共に創立20周年式典を新武道場にて盛大に挙行了た。

しかし，翌1944（昭和19）年，東条内閣下の文系縮小政策により本校は危

機になったが、福知山高商を吸収合併することにより、4月松山経済専門学校となり、600人体制を維持した。

1945（昭和20）年7月26日の松山大空襲で本校の木造の校舎（2，3，4号館）、武道館が焼失し、大被害を受けた（鉄筋の本館、講堂、加藤会館等は焼失を免れた）。

同年8月15日の敗戦をへて、戦後改革、教育改革により、日本国憲法、教育基本法、学校教育法が制定され、田中校長は1947（昭和22）年2月公職・教職追放された。

④第4代伊藤秀夫松山経済専門学校長時代（1947年2月～1951年3月）、初代松山商科大学長時代（1949年4月～1957年3月）

田中校長が公職追放された後、第4代松山経済専門学校長に就任したのが長老でリベラリストの伊藤秀夫であった。この伊藤秀夫校長の下で、4年制大学への昇格が計画され、1949（昭和24）年4月、新制大学・松山商科大学が発足し、伊藤秀夫が初代学長に選出された。松山商科大学は商経学部の1学部、2学科（経済、経営）体制で出発した。定員は経済学科1学年100名、経営学科1学年100名、総定員800名であった（1学年の定員200名は戦前の田中校長時代と同規模で出発）。

大学発足にあたり戦災で焼失した木造校舎（2，3，4号館）の再建が必要で、1948（昭和23）年4月に木造の2号館（2階建、246坪）、4号館（平屋、164坪）を竣工させた。また、1953（昭和28）年11月には固定席500、補助席200を持つ近代的でスマートな新講堂を竣工させた（本館の南側）。

また、伊藤学長の下で、加藤初代校長が勤労者のために造った夜間部を復活させ、1952（昭和27）年4月短期大学部を開設した。伊藤秀夫が短期大学部長に就任した。

松山商科大学創設期に多大な貢献をした伊藤学長は1957（昭和32）年2月病気のため辞任した。

⑤第2代星野通学長時代（1957年4月～1963年12月）

伊藤学長が病气辞任の後、2代目学長に就任したのが、民法典論争で有名な法学博士星野通である。

同学長時代に本館内の図書館が手狭になっていたので、創立35周年・大学昇格10周年記念事業の一つとして1959（昭和34）年11月鉄筋2階建の新図書館（本館の東側の道路を隔てた場所を購入し、そこに建設）を竣工させた。

また、星野学長は第1次高度経済成長にともなう進学率の上昇に対応し、商経学部を発展的に解消し、経済学部、経営学部の2学部の開設を計画し、また、定員を経済・経営学部共に1学年各150名に増やすこととし、1961（昭和36）年9月文部省に認可申請し、62（昭和37）年1月認可が下りた。そして、1962年4月、経済学部、経営学部が開設された。そして、その結果、経済・経営学部共に1学年各150名、定員各600名となり、学園全体では1,200名体制に拡大した。そのためには新教室が必要で、1962年4月に3号館（現、2階建）を竣工させた。

経済・経営の2学部の創設に多大な貢献をした星野学長は任期の最終年の1963年秋の衆議院選挙で学生が投票入場券を売り込む選挙違反事件があり、辞意を表明した。

⑥第3代増岡喜義学長時代（1964年1月～1968年12月）

星野通の後任学長は増岡喜義で、松山高商の第1期の卒業生であり、九州帝大に進学し、本校に採用された卒業生学長の第1号であった。

同学長下、1966（昭和41）年4月、第1次ベビーブーム世代（1947年～49年生まれ）が大学に進学する世代となり、それへの対応として、経済・経営とも各100名増をはかり、共に1学年各250名、定員1,000名とし、学園全体では2,000名体制に大幅に増やした。

そのため、前年の1965年6月26日に研究センター（現、5階建）、1966年3月31日に2号館（現、2階建）を竣工させた。また、67年2月に体育館も

竣工させた。

増岡学長は2期目の任期半ばに健康上の理由で辞任した。

⑦第4代八木亀太郎学長時代（1969年1月～1974年3月）

増岡喜義辞任の後、第4代学長に就任したのが言語学者として著明な八木亀太郎であった。

同学長の時代に、学生数の増大、教員の増大に対応し、1969（昭和44）年8月に学生待望の学生会館を竣工させ、また研究センターの増築（研究センターの西側の2階建部分）、6号館（現）、そして、なによりも9月1日に新本館（現1号館、5階建。1階が事務室、2階が学長室、学部長室、理事室、3、4、5階がゼミ室等）を竣工させた（そのために、前年の3月に1924年竣工の旧本館の南半分の建物を解体した）。

また、1972（昭和47）年4月に大学院経済学研究科修士課程を開設した。

さらに、八木学長は創立50周年記念事業の一環として、経済・経営につぐ第3の学部として人文学部の新設を計画した。人文学部は、国際視点に立って政治・経済・文化を理解し、世界市民として自由且つ適確に行動しうる有能な人材育成を行なうことを目的とするものであり、また女子学生を増やすねらいがあった。1973（昭和48）年6月に文部省に認可申請し、74（昭和49）年1月、文部省から認可が下りた。そして、人文学部のため、74年1月31日、新校舎4号館（現、4階建）を竣工させた。

1973（昭和48）年11月23日に、50周年記念式典が八木学長の下で举行された。しかし、その後、八木学長は2期目の終わりに病気のために辞任した。

⑧第5代学長太田明二学長時代（1974年4月～1976年12月）

八木学長病気辞任の後、学長に就任したのが経済学部教授の太田明二である。同学長就任早々の1974（昭和49）年4月に前八木学長の手がけた人文学部が開設された。人文学部は2学科体制で、英語英米文学科1学年60名、定員240名、社会学科1学年60名、定員240名であった。その結果、学園全体では2,480名体制に増大した。

また、1974年4月には八木学長時代に手がけられた大学院経済学研究科博士課程が開設した。

さらにまた、1976（昭和51）年3月、八木学長時代に手がけられていた50年記念館（新図書館）が竣工した。そのために、講堂（1953年11月竣工）を75年3月に取り壊した。

太田学長は、1976（昭和51）年4月、進学率増大のために経済・経営の2学部の定員各50名増を図り、経済・経営共に1学年各300名、定員1,200名、合計2,400名とし、人文学部を合わせて学園全体では2,880名体制とした。

⑨第6代伊藤恒夫学長時代（1977年1月～1979年12月）

太田学長の後、第6代学長に就任したのが人文学部教授で教育学者の伊藤恒夫で、初代学長伊藤秀夫の長男であった。

伊藤恒夫学長は1979（昭和54）年4月、3学部の定員増（経済・経営は各50名、人英は20名、人社は40名増）を図り、経済学部1学年350名、定員1,400名、経営学部1学年350名、定員1,400名、人英1学年80名、定員320名、人社1学年100名、定員400名、学園全体で3,520名体制とした。

そして、そのために新本館と新校舎の建設が計画され、1979年7月に1924年の旧本館の残り全部を解体した。

また、1979年4月には大学院経営学研究科修士課程を開設した。

⑩第7代稲生晴学長時代（1980年1月～1985年12月）

伊藤学長の後、第7代学長に就任したのが経済学部教授の稲生晴である。稲生氏は松山経済専門学校卒で、本校出身の学長の2人目にあたる。

稲生学長下、1981（昭和56）年1月26日、前、伊藤学長時代から手がけられていた新本館（現本館、6階建。1924年の旧本館、1969年の本館につぐ3代目の新本館にあたる）と5号館（現、3階建）が竣工した。

また、1981年4月には経営学研究科博士課程が開設された。

同学長下、第2次ベビーブーム（1971年～74年誕生）世代の大学進学ブームに対応し、文部省の指示の下、3学部の期限付きの臨時定員増－1986（昭和

61) 年度から 1992 (平成 4) 年度にかけて 7 年間 - の申請を文部省に行ない、1985 (昭和 60) 年 12 月に認可を受けた。

⑪第 8 代越智俊夫学長時代 (1986 年 1 月～1988 年 12 月)

稻生学長の後、第 8 代学長に就任したのが経営学部教授の越智俊夫である。

越智学長下、前、稻生学長時代に申請、認可された、第 1 次臨定が 1986 (昭和 61) 年 4 月から実施された。それは、経済・経営各 50 名、人英・人社各 20 名増で、その結果、経済学部 1 学年 400 名、定員 1,600 名、経営学部 1 学年 400 名、定員 1,600 名、人英 1 学年 100 名、定員 400 名、人社 1 学年 120 名、定員 480 名となり、学園全体で 4,080 名体制となった。

また、同学長下で新設学部の法学部が計画され、1986 年 7 月認可申請書 (第 1 次)、87 年 6 月認可申請書 (第 2 次) を提出し、同年 12 月 23 日認可がおり、1988 (昭和 63) 年 4 月、法学部が開設された。1 学年 200 名、定員 800 名で、その結果学園全体として 4,880 名体制となった。

そのための新校舎として 1988 (昭和 63) 年 1 月 20 日に 7 号館 (法学部校舎、3 階建) を竣工させた。

なお、法学部の開設に最も尽力した山口卓志教学担当理事 (経済学部教授) は法学部の認可の直前、1987 年 11 月に急死した。また、越智学長も法学部を開設した年の 1988 年 12 月、在職中病気のため死去した。

⑫第 9 代神森智学長時代 (1989 年 1 月～1991 年 12 月)

越智学長が死去した後、第 9 代学長に就任したのが経営学部教授の神森智氏である。本校出身の学長 3 人目である。同学長の下で、1989 (平成元) 年 4 月、法学部誕生により校名変更の機運が起き、校名を松山大学とした。

また、同学長下の 1991 (平成 3) 年 4 月、既存の 3 学部が臨時定員増を行っているの、後から生まれた法学部にも臨時定員増ということで、完成年度を前にして、1991 年度から 1999 (平成 11) 年度にかけて 9 年間にわたる法学部の臨時定員 50 名増を行ない、1 学年 250 名、定員 1,000 名に増やし、学園全体では 5,080 名体制とした。

また、学生数が増えたため、新校舎として1991年3月28日に8号館を竣工させた（8階建）。

また、神森学長時代の1991年9月、92年度には3学部第1次臨定が切れるので、さらに3学部の臨時定員の期間延長（1992年度～99年度）を文部省に申請し、12月に認可を受けた（第2次臨時定増）。

なお、1992（平成4）年の法学部完成にあわせて、法学研究科の開設が計画されたが、教授会の反対で挫折している。

⑬第10代宮崎満学長時代（1992年1月～1997年12月）

神森学長の後、第10代学長に就任したのが経済学部教授の宮崎満氏である。同学長下、前、神森学長時代に申請、認可された第2次臨時定（期間延長）を1992（平成4）年4月から実施した。引き続き、経済・経営各50名、人英20名、人社20名で、経済学部1学年400名、定員1,600名、経営学部1学年400名、定員1,600名、人英1学年100名、定員400名、人社1学年120名、定員480名、3学部全体で4,080名で、法を合わせ、学園全体で5,080名体制を続けることになった。

ところが、宮崎学長は更なる臨時定員増の計画をした。ただし、人文学部教授会が更なる臨定増を否決したため、経済・経営のみ臨定各50名増やすこととし、1992（平成4）年9月に文部省に申請し、12月に認可された。そして、1993（平成5）年4月から1999（平成11）年度にかけて7年間にわたり実施された。その結果、経済学部は1学年450名、定員1,800名、経営学部も1学年450名、定員1,800名。その結果、学園全体で5,480人体制となった（第3次臨定）。

そして、臨定で学生数も増えたため、1994（平成6）年8月には厚生施設・カルフルを竣工させた。

⑭第11代比嘉清松学長時代（1998年1月～2000年12月）

宮崎学長の後、第11代学長に就任したのが経済学部教授の比嘉清松氏である。同学長時代の1999（平成11）年2月、同窓会館である温山会館が竣工した。

また、2000（平成12）年4月、第3次臨定は1999（平成11）年度で終了するので、臨定をどうするか議論となり、臨定の半分を恒常定員化することを決め、ただ、経済・経営の負担が大きいので微調整となり、各10名を人文に配分することにし、定員は次の如く総定員4,840人体制になった。

	臨定前			臨定			終了後		
経済	350	→		450	→		390	(原則 400 のところを 10 減)	
経営	350	→		450	→		390	(原則 400 のところを 10 減)	
人英	80	→		100	→		100	(原則 90 のところを 10 増)	
人社	100	→		120	→		120	(原則 110 のところを 10 増)	
法	200	→		250	→		210		

⑮第12代青野勝広学長時代（2001年1月～2003年12月）

比嘉学長の後、第12代学長に就任したのが経済学部教授の青野勝広氏である。本校出身の4人目の学長にあたる。

青野学長時代に、新学部「総合マネジメント学部」の提案がなされたが、2002年10月の合同教授会で否決され、また、解任騒動がおきている。

⑯第13代神森智学長時代（2004年1月～2006年12月）

青野学長の後、再び、学長に復帰したのが神森智氏である。同学長の下で新学部の検討が始まった。それが薬学部であった。その理由は既存学部は成熟・衰退、じり貧であり、理系設置、文理融合を図り、総合大学化によって大学の活性化が図られる、との考えの下、薬学部が選択された。なぜ薬学部か。それは競争倍率はきわめて高く、全国から集まる、社会貢献度が高く魅力がある、中国四国に少なく希少価値がある、既設学部にも波及し、県外から志願者が増える、等々が理由であった。2004（平成16）年11月4日の合同教授会で、薬学部設置が可決された。定員160名、6年制、総定員960名、入学金30万円、学費200万円（6年間1,200万円）であった。2005年12月文部省の認可を受け、2006年4月開設した。その結果、学園全体では5,800人体制となった。

そして薬学部のために2006年8月、9号館（10階建て）を竣工させた。

また、2006年4月大学院社会学研究科も開設した。さらに、言語コミュニケーション研究科も申請し、2007年4月発足させた。

⑰第14代森本三義学長時代（2007年1月～2012年12月）

神森学長の後、第14代学長に就任したのが経営学部教授の森本三義氏である。本校出身の5人目の学長にあたる。

同学長時代、薬学部は悪戦苦闘し、そのため、6年間の完成年度の翌年、2012（平成24）年4月定員削減を図り、1学年定員100名、定員600名に減らし、学園全体では5,440人体制となった。

また、日赤から看護学校を引き受けてくれないかとの要望があり、受け入れを理事会がきめたが、教授会側は消極的であり、次期学長に託された。

⑱第15代村上宏之学長時代（2013年1月～2017年12月）

森本学長の後、第15代学長に就任したのが経営学部教授の村上宏之氏である。

同学長下、懸案の看護学部の提案がなされたが、2014年3月の合同教授会で否決され、現在5学部6学科体制、5,440人体制が続いている。

また、同学長下、2014年4月大学院医療薬学研究科博士課程（4年制）が開設された。

また、2016（平成28）年3月に南海放送跡地に榎又キャンパスが建設された（3階建、ガラス張り）。

第10に、年表には戦後の大学の負の面が一切触れられていないことである。いくつか列挙しておこう。

①星野学長時代の1963（昭和38）年11月、第30回衆議院選挙において、学生が投票券売り事件を引き起こすという不祥事があったが記されていない。

②八木学長時代の、1969（昭和44）年10月21日、国際反戦デーで、「商大学生同盟」「愛媛大学全共闘」が新本館（現1号館）を封鎖した事件がおきているが（その後封鎖は解除され、11月14日、封鎖学生10名に2カ月の停学処分が下されている）、それも記されていない。

③さらに、戦後最大の不祥事件は、青野学長時代のことである。同学長下の新学部構想が挫折し、その後学長解任騒動が起き、全国報道されたが、年表には一切記されていない。この事件は新聞、社会をにぎわせた騒動であり、本学にとっては不都合な真実である。その概要は次の如くである。

2000（平成12）年11月28日、学長選挙で青野教授が当選し、翌2001（平成13）年1月1日、同教授が学長・理事長に就任した。以後、寄附行為改正、法人組織改革、新学部開設、その他今治新都市構想の下で大学誘致（松山大学新学部）問題の検討も始めた。

寄附行為改正は、同年10月26日変更申請、11月9日に認可された（要点は、学長・理事長の人事権強化）。また、2002（平成14）年4月1日には法人本部を新設し、県庁から本部長、愛媛銀行から次長を採用した。また、新学部「総合マネジメント学部」を提案したが、同年10月31日の合同教授会で否決され、さらに青野学長不信任の緊急動議が出て、可決された。しかし、青野学長は法的拘束力が無いとして学長の地位にとどまった。

そこで、教職員有志が学長を解任できるリコール規定の創設を求めて、同年12月13日18時半より学長選考規定改正の選挙権者会議を開催。教員71名、職員51名、計122名参加の下に、学長選考規程の改正案（学長リコール規程の新設）が提案され、賛成106、反対1で可決し、12月19日、各学部・職員から学長選挙管理委員会を選出し、12月20日、選挙管理委員会が学長選考規程にもとづき学長選挙解任投票を12月27日に行なうことを告示した。

ところが、12月24日、青野学長・理事長が松山地裁に学長解任投票の差止めを求める仮処分命令申し立て書を提出し、12月26日、地裁は「本件申立てを却下する」と判決した。すなわち、青野学長側の学長解任投票の差止め請求を却下し、青野学長・理事長側の敗訴となった。ただし、判決は「学部長らが行なった選挙権者開催手続きは違法であるといわざるを得ない。…これらの手続きを前提として本件投票が行なわれたとしても、効力は生じない。…しかし、そうであるからといって、直ちに本件投票の差止めが認められるわけでは

な（い）」といい、学長解任投票を認めるが、法的拘束力はないという痛み分けの判決であった。

12月27日、11時より青野学長解任投票がなされた。結果は、196人中、145人投票。賛成136、反対3、無効6票。7割が不信任投票であった。しかし、青野学長は法的拘束力がないとして選挙結果を拒否し、学長職にとどまった。2003（平成15）年2月21日、教職員114名が松山地裁に青野理事長に対し「選挙権者会議召集請求訴訟」（学長選挙権者会議を召集し、学長解任規定をもうけることをもとめる）を提訴した。また、同年4月18日、教職員103名が松山地裁に学校法人に対し「選挙権者会議召集請求訴訟」も行なった。同年8月19日判決が出て、前者は却下、後者は棄却され、教職員側が敗訴した。同年9月1日、教職員100名が高松高裁に控訴した。

なお、この騒動の顛末であるが、同年11月25日、学長選挙があり、青野教授は立候補せず、すでに退職していた神森智氏が再度推薦され、当選した。2004（平成16）年1月1日、神森智氏が学長・理事長に就任（在任：2004年1月～2006年12月）し、教職員側が神森理事長と和解し、高裁への訴訟の取り下げがなされ、大学の正常化がなされたのである。

④さらに薬学部問題である。文理融合を目的に設立されたものの、その後入試結果は芳しくなく、悪戦苦闘し、第14代森本三義学長時代の2012（平成24）年4月定員削減を図り、1学年定員100名、総定員600名に減らし、今日に至っているが、この薬学部の定員削減のことが年表には触れられていない。

参考までに薬学部の入学者数の推移を示しておこう。

年 度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
定 員	160	160	160	160	160	160	100	100	100
入学者	159	134	113	90	83	78	83	128	126
充足率	99.4	83.8	70.6	56.3	51.9	45.6	83.0	128.0	126.0

年度	2015	2016	2017
定員	100	100	100
入学者	106	100	100
充足率	106.0	100	100

⑤さらにまた、年表には看護学部挫折のことも触れられていない。第14代森本三義学長時代に日本赤十字社の依頼により看護学部構想が提案された。理事会は積極的であった。しかし、教授会は消極的で、第15代村上宏之学長時代の2014（平成26）年3月14日、全学教授会で看護学部が提案されたが、圧倒的多数の下に否決された。

第11に、年表には2001（平成13）年3月24日の芸予地震のことが記されていない。この芸予地震は、本学の施設設備に多大の被害を与え、建物には亀裂が入り、研究室の書籍は目茶苦茶に散乱したのであり、年表に記すべき重大災害である。

第12に、年表に卒業生や学生達の活躍が掲載されていないのも問題である。

たとえば、最近のことでは、2004（平成16）年夏のアテネオリンピック女子マラソンで、本校出身の土佐礼子（平成11年人文卒）が5位入賞したこと、2016年夏のリオデジャネイロオリンピック陸上女子3,000m障害に経営学部3年生の高見澤安珠が出場したこと、同年10月30日の仙台での第34回全日本大学女子駅伝で日本一になったこと等々である。

第2節 「松山大学のあゆみ」（歴史年表）の試案

『学生便覧』には掲載する年表については、行数、字数も限られているので、重要事項に限定し、取捨選択する必要がある。大学院の開設や国内外の大学協定や地方自治体、企業との協定等については煩雑になるので、別の表にした方がよいと思い年表に入れなかった。また、定員を重視し、建物については最低限にとどめた。さらに学校の負の面については最低限にとどめた。以下、私の試案を示しておこう。

- 1922（大正11）年9月 松山高等商業学校發起人会を開き，設立計画を決め，加藤彰廉，加藤恒忠，井上要，新田長次郎ら8名の設立委員を決定。
- 12月 文部省に財団法人松山高等商業学校寄附行為および松山高等商業学校設置認可申請。1学年定員50名（総定員150名），修業年限3年。
- 1923（大正12）年2月 文部省による認可。
- 4月 松山高等商業学校開校。加藤彰廉初代校長に就任。北予中学の校舎を借りて授業開始。
- 1924（大正13）年4月 鉄筋4階建の本館竣工。
- 1925（大正14）年4月 総定員を250名に増員。
- 1926（大正15）年3月 第1回卒業式で，加藤校長が校訓三実「実用・忠実・真実」を宣言。
- 1931（昭和6）年4月 定員を1学年100名（総定員を300名）に増員。
- 1933（昭和8）年9月 加藤校長死去。
- 10月 渡部善次郎第2代校長に就任。
- 1934（昭和9）年5月 渡部校長拉致事件がおき，辞任。
- 10月 教授会の推薦で田中忠夫が第3代校長に就任。「日本一の高商に」のスローガンを掲げる。
- 1936（昭和11）年7月 新田長次郎死去。
- 1938（昭和13）年4月 定員を1学年150名（定員450名）に増員。
- 1941（昭和16）年4月 定員を1学年200名（定員600名）に増員。東亜科設置（50名）。
- 4月 始業式に当たり，田中校長が校訓「三実主義」を明文化し，順序を「真実・実用・忠実」に変更。
- 12月 第17回生繰り上げ卒業式挙行（3カ月短縮）。
- 1942（昭和17）年7月 住谷悦治教授，文部省の圧力により辞職。

- 9月 第18回生繰り上げ卒業式挙行（6カ月短縮）。
- 1943（昭和18）年9月 第19回生繰り上げ卒業式挙行（6カ月短縮）。
- 11月 三恩人の胸像供出。
- 1944（昭和19）年1月 文部省が文系縮小政策を打ち出す。
- 2月 福知山高等商業学校を吸収合併し、定員600名を確保。
- 4月 校名を松山経済専門学校に変更。田中忠夫が校長に就任。
- 9月 第20回生残留者繰り上げ卒業式挙行（6カ月短縮）。学徒通年動員開始。殆ど授業が行なわれなくなる。
- 11月 古川洋三教授、官憲の圧力により退職。
- 1945（昭和20）年4月 文部省により、授業停止命令。
- 7月 松山大空襲で、本校は大被害を受け、木造の2, 3, 4号館、武道館等が焼失。鉄筋の本館、加藤会館は焼け残る。
- 8月 敗戦。
- 9月 第21回卒業式。3年生在籍者全員卒業。授業再開。
- 1947（昭和22）年2月 田中忠夫校長、浜田喜代五郎教授、教職追放。第4代校長に伊藤秀夫教授が就任。
- 1948（昭和23）年7月 伊藤校長、文部省に松山商科大学設置認可申請書提出。
- 1949（昭和24）年2月 文部省認可。
- 4月 松山商科大学開校。伊藤秀夫初代学長に就任。商経学部（経済学科1学年100名、経営学科1学年100名）発足。
- 1952（昭和27）年4月 短期大学部開校。伊藤秀夫短期大学部長に就任。
- 1957（昭和32）年4月 星野通学長が校訓「三実主義」を再興。順序を「真実・忠実・実用」と変更。

- 1962（昭和37）年4月 同学長時代，商經学部を發展的に解消し，経済学部，経営学部を開設。定員を各150名に増員。
校訓「三実主義」の簡明化をはかり，学生便覧に掲載。
- 1963（昭和38）年11月 三恩人の胸像復元。
- 1966（昭和41）年4月 経済，経営の1学年各250名に増員。
- 1969（昭和44）年9月 新本館（現，1号館）竣工。
10月 全共闘学生による本館封鎖。
- 1974（昭和49）年4月 人文学部開設（英語英米文学科1学年60名，社会科学1学年60名）。
- 1976（昭和51）年4月 経済，経営の1学年各300名に増員。
- 1979（昭和54）年4月 経済，経営，人文の定員増員（経済・経営各350名，人英80名，人社100名）。
- 1986（昭和61）年1月 新本館（現，本館）竣工。
4月 第1次臨時定員増を図る（～1992年＝平成4年まで。
経済・経営各50名，人英・人社各20名増で，経済・経営各400名，人英100名，人社120名とする）。
- 1988（昭和63）年4月 法学部を開設（1学年200名）。
- 1989（平成元）年4月 校名を変更し，松山大学とする。
- 1991（平成3）年4月 法学部臨時定員増を図る（～1999年＝平成11年度まで，50名）。
- 1992（平成4）年4月 第2次臨時定員増を図る（～1999年＝11年度まで。
経済・経営各50名，人英・人社各20名増で経済・経営各400名，人英100名，人社120名とする）。
- 1993（平成5）年4月 第3次臨時定員増を図る（～1999年＝11年度まで。
経済・経営のみ1学年各50名を増員し，経済・経営各450名とする）。
8月 東本館竣工。

- 2000（平成12）年4月 臨定終了に伴い、臨定の半分を恒常定員化。経済・経営各 390 名，人英 100 名，人社 120 名，法 210 名とする。
- 2001（平成13）年3月 芸予地震で本校の施設設備等が被害を受ける。
- 2002（平成14）年10月 理事会提案の新学部「総合マネジメント学部」が教授会で否決される。後，学長解任騒動が起き，裁判となる。
- 2004（平成16）年8月 アテネオリンピック女子マラソンで，本学出身の土佐礼子（平成 11 年人文卒）が 5 位入賞。
- 2006（平成18）年4月 薬学部開設（1 学年 160 名，6 年制）。
- 2011（平成23）年4月 校訓「三実主義」の順序を「真実・実用・忠実」に変更。
- 2012（平成24）年4月 薬学部の定員 100 名に削減。
- 2014（平成26）年3月 理事会提案の新学部「看護学部」が教授会で否決。
- 2016（平成28）年3月 樋又キャンパス竣工。
- 8月 リオデジャネイロで陸上女子 3000m 障害に日本代表で経営学部 3 年生の高見澤安珠が出場。
- 10月 仙台での第 34 回全日本大学女子駅伝で日本一。

第2章 創立の三恩人について

第1節 創立の三恩人の銅像の場所と紹介文の問題点

松山大学の「創立の三恩人」である，創立者の新田長次郎（温山翁），キーマンの加藤恒忠（拓川翁），初代校長の加藤彰廉の胸像が現在構内に設置され，生け垣で囲まれ，学園を見守っている。そして，それぞれの石碑には簡単なプロフィールが書かれている。

この三恩人の胸像の場所および紹介文にも歴史がある。現時点で入手した資料および聞き取り等により紹介しておきたい。

初代加藤彰廉校長は、1928（昭和3）年昭和天皇の御大礼記念事業の一環として、学園創立に貢献した故拓川翁の胸像建設を計画し、また同時に温山会も長次郎翁の胸像建設を計画（なおこのとき長次郎翁は生存中）、翌1929（昭和4）年10月11日に両翁の胸像除幕式が加藤拓川未亡人、新田長次郎本人の出席、また秋山好古大将、市村慶三愛媛県知事、御手洗忠孝松山市長らの来賓出席の下に行なわれた。この両翁の胸像除幕式の模様が『松山高商新聞』に掲載されているので紹介しよう。

「中庭には加藤氏新田氏の両胸像は紅白の幔幕に囲まれて秘められて居る。やがて一同拍手裡に先づ故加藤拓川翁の幕が切って落され在りし日を思はず威容を現はした。未亡人も追憶の情堪へ兼ねてか涙ぐましい態度で傍らの藤野氏と共に『よく似て居られますネ』などと語り合って居られる。『オーよく出来た。併し横顔の方がよく似ているよ』と詠嘆する秋山大将、次いで同じく熱烈な拍手裡に新田温山翁の胸像が現れる。口辺に微笑さへ堪へて福德円満の相ある立派な胸像である。前に立って眺めて居られる新田氏の胸中感慨無量なるものがあつたであらう。斯くて両恩人の胸像除幕は全く終わり今後永遠に本校校庭に於て星移り年変わるとも出で、行く人々も入り来る人にも永遠に崇敬の的として仰がれるであらう」³⁾

このように、長次郎翁と拓川翁の両銅像は本館（1924年竣工）の中庭に置かれたことが判明する。併し、中庭のどこかについては記されていない。そこで、別の資料・証言を紹介しよう。

1934（昭和9）年3月に卒業した小田武雄（第9期卒、その後、九州帝大法

3) 『松山高商新聞』第47号、昭和4年10月25日。

文学部に進学。後、作家）が『温山会報』に次のように記している。

「私どもがその頃（合併教室）と呼んでいた教室の前は中庭で温山翁と向き合って拓川先生のブロンズ像が御影石の台上にあった。生徒は休憩時間、中庭で日向ぼっこなどしながら、胸像の頭に戯れに学帽をかぶせたりしたものであった。胸像は鼻眼鏡をかけていた。なかなかしゃれた風貌であったが、その頃はこの胸像が一体誰であるのか、どんな人なのか知る由もなく、特別の親しみを感じることもなかった」⁴⁾

このように、両翁の胸像は本館の合併教室の前の中庭に向かい合って置かれていた。現在の松山大学の校舎の位置でいえば、今の1号館（1969年9月竣工）と本館（1981年1月竣工）と5号館（同）に囲まれた池のある中庭である。そして、元、松山大学長神森智先生の記憶によれば、温山翁は池の西に東向きに置かれていたので（1944年に神森氏が入学したときには三恩人の胸像は金属回収令により供出されていたので台座だけが残っていた）、拓川翁は池の東に西向きに設置されていたと考えられる。

1933(昭和8)年9月加藤彰廉校長が死去し、2代目の渡部善次郎校長時代に加藤彰廉先生記念事業の一環として彰廉先生の胸像建設が計画され、制作者は帝展審査員の横江嘉純氏に依頼し、3代目の田中忠夫校長時代の1935(昭和10)年4月26日に彰廉先生の胸像の除幕式が遺族の出席のもとで行なわれた。その除幕式の模様は次の如くであった。

「我等の慈父故加藤彰廉校長の銅像除幕式は四月二十六日午前十時より、思出も深き校長室前に於て遺族教職員列席並びに生徒一同参列し、麗らかな春光のもとに行なわれた。自ら身の引締まるが如き厳肅な官主の祝

4) 小田武雄「拓川先生」『温山会報』第7号、昭和39年、72頁。

詞について孫娘の可愛い、手によって紅白の幕が除けられるや折柄春日愈々遅々、昔日の面影そのまゝの微笑さへ浮べし温厚寛容な姿を拝し、親しく教へを受けた職員始め上級生は今更に生前の高邁なその人格を偲んで思出を新たにし沈黙の中に無量の感切々たるものあり。下級生新入生も親しくこの寛容そのもの、初代校長の像に接し深く心に感銘するところあるもの、如くであった」⁵⁾

彰廉校長の胸像は当初本館中庭の予定であったが、本館（1924年竣工）玄関の南側の庭、校長室前に変更された。『松山高商新聞』第102号に「この胸像を安置する場所は学校前庭の玄関に向かって左の校長室の窓の外側に、東向きに据えられることに決定した」⁶⁾とある。

その後、1937（昭和12）年4月加藤会館（学生会館）が竣工して、彰廉先生の胸像は本館前から加藤会館前に移設された。『松山高商新聞』第123号は「学校玄関横にある加藤先生の銅像も、追って会館の傍らに移転される」⁷⁾と記している。

なお、この三恩人の胸像の写真は『松山商科大学六十年史（写真編）』の29頁に載せられている。

1934（昭和9）年10月、第3代校長に就任した田中忠夫は、加藤彰廉時代のこぢんまりとした学校からの脱皮をはかり、「日本一の高商」を目指し、学園の拡張に邁進した。生徒定員を倍加し、教員を増員し、次々に新校舎の建設を進め、校地も大幅に増やし、さらに学園の緑化も推進した。

1941（昭和16）年は創立18周年にあたる。そこで、『松山高商新聞』第169号（昭和16年10月25日）は、18周年記念特集号を組み、田中校長が学園の状況を「建設途上の学園」と題して報告している。大要は次の如くである。

5) 『松山高商新聞』第104号、昭和10年5月13日。

6) 『松山高商新聞』第102号、昭和10年3月11日。

7) 『松山高商新聞』第123号、昭和12年4月20日。

「生徒定員について、大正12年の創立当時1学年50名、全体で150名という少数に過ぎなかったが、昭和6年に300名、13年に450名、16年に600名までに生長した。校舎も大正13年に本館、昭和3年に講堂、昭和12年に加藤会館、昭和14年に第1新館（2号館）、16年に第2新館（3号館）が完成し、今まさに合併教室2室（4号館）が完成せんとしている。校地の拡張は昭和3年に2,000坪を拡張したが、その後長らく休止していたが、昭和12年以降拡大し、本年までに1万坪を拡張し、待望の2万坪に達した。創立時の5,000坪に比し隔世の感がある。研究部門も松山高商論集をすでに4巻出し、研究彙報も6冊出し学界への責務を果たしている。この間の幾山河を振り返り感慨なきを得ない。しかし、学園の建設はまだ終わったのではない。校地の整備は進行中であり、造園計画も始まったばかりで。建築も道場、体操館、講堂、食堂、寄宿舎の建設も残っている。前途をおもえばまだ多事多難であるが、しかし我等には頼るべき設立者がいる、信を変えぬ1,300名の温山会員がいる、盟友たる同僚諸君がいる、愛すべき660名の学生達がいる。多難なる前途とはいえ、必ず切り抜けることができる確信がある」⁸⁾

そして、同号に伊藤秀夫生徒課長が「緑化された学園」と題し報告しているが、その中に長次郎翁と彰廉校長の胸像の記述があるので少し長いが引用しておこう。

「卒業生諸君は昔から校友会予算の中僅少の金額が学園緑化の基金として積立られて居たのを御承知でせう。併し何年たっても一向目にたつ程の緑化が出来ず学校は焼け野原の感がして先生も生徒も多大の不満を感じて居たが、本学年に入って新田家の特別の御好意で巨額の金を緑化の為に提

8) 『松山高商新聞』第169号、昭和16年10月25日。

供して下さって大阪市公園課の技師の設計により、同じく大阪から実地の技術者が来松、久しきに亘りて其工事に当り、此秋大体の施設が出来上った。玄関を始として中庭から運動場、扱は新たに広くなった校地周囲に至る迄本当に気持ちよい緑の学園を作り出した。本校舎の中庭には中央に広い池を設け、鯉を放ち、睡蓮をしつらえ、その四周は石畳と芝生。御承知のあのクロイスタに沿ふては棕組の並木、西寄りに東面している温山先生の銅像はいままでと違っていかにも居心地よげにみうけられる。

小春日の暖かい陽を浴びて若い女事務員が池の傍らに立って無心に鯉を見入る風情を想像して見て下さい。コンクリートのやゝもすれば殺風景に見ゆる校舎には蔦が這って四時折々の色取りでこれに無限の和かみを添へて居るから安心なもの。今年は天候の為か虫害があつて秋の紅葉がいつもの通りには参るまいと気づかはれるが其枯れた姿を哀れとこそ思へ、ゆめきたならしと思ふべきでない。洋式建築にはなくて叶はぬ蔦である。又多くの諸君の御承知ない新教室二棟と講堂との間にはさまれ、東西にわたり整然たる洋式の芝生と花壇があつて、西の方、加藤会館前の庭園につながる。この会館の東から正面につらなる特別庭園は少しく小高く盛り上がった芝生に、松、蘇鉄、躑躅などを植え込んだもので、東寄りの正面の程よいところに加藤先生の知性あふれた温容が仰がれる…」⁹⁾

このように、本校舎（1924年竣工）の中庭に池を設け、周囲を石畳と芝生で装い、長次郎翁の胸像が東に向かって置かれていたこと、彰廉先生の胸像が加藤会館前に置かれていたことがわかる。なお、この中庭は現在の松山大学の1号館と5号館と本館との間に小池があり石畳で囲われているが、この時に作られたものであることがわかる。

なお、腑に落ちないのは伊藤秀夫が拓川翁の胸像のことに触れていないこと

9) 『松山高商新聞』第169号、昭和16年10月25日。

である。本校舎の中庭に長次郎翁と向かい合っていたとされる拓川像はどこに移されたのであろうか。『松山高商新聞』第164号（昭和16年4月25日）に「壮麗なる思索の殿堂へ 造園計画着々と進展」の記事の中に、「現在は着々として建設中であるが、新館の西に並んで造られた木造二階建ての校舎は殆ど完成目下、内部の諸設備の工事中である。加藤会館の前の築地に彰廉先生の銅像を、新館の前に拓川翁の銅像を移し、三ヶの銅像の築地を中心として灌木と芝生の庭が美しく造られ…」¹⁰⁾とあることから推定し、新校舎の2号館（2階建）が1939（昭和14）年3月に竣工し、その西隣りに3号館（2階建）が1941年5月竣工するので、拓川翁像を中庭から新校舎2号館前に移す予定であったと考えられる。しかし、神森先生からの聞き取りによると、拓川翁像は昭和17年3月に竣工する合併教室（旧4号館、今の3号館あたり）の前に南向きに置かれていたとのことである。どちらが正しいのだろうか。

創立20周年記念式典が1943（昭和18）年5月15日に挙行され、その時來賓一同に片岡銀蔵画伯の油絵が絵はがきにして配られた。3つの絵はがきの中に3つの像が描かれている。その中に、加藤会館の前に置かれたのは明らかに加藤彰廉先生像であるが、あとの2つをよく見ると、平屋建の新館（4号館）の東側に南向きに銅像があり、また、本館のとなりの講堂・図書館の西側に南向きに銅像があり、ともに拓川翁と思われる¹¹⁾神森先生の記憶が正しいようである。

以上、戦前の三恩人の胸像は、長次郎翁は本館の中庭にずっと置かれていたが、拓川翁は本館の中庭→新校舎の4号館前に移転し、加藤彰廉先生は本館前→加藤会館前に移転したといえよう。

ところが、その半年後の1943（昭和18）年11月、政府・東条内閣の金属回収令により、三恩人の胸像が供出させられてしまった。

1944（昭和19）年4月、松山高等商業学校は松山経済専門学校に名称を替

10) 『松山高商新聞』第169号、昭和16年10月25日。

11) 『松山商科大学六十年史（写真編）』4、5頁。

え、1945（昭和20）年8月に敗戦を迎えた。その後、戦後の教育改革により、1949年に松山経済専門学校は松山商科大学に昇格し、初代学長には伊藤秀夫が就任したが、この伊藤学長時代（1949年4月～1957年3月）には三恩人の胸像は不在のままであった。

第2代星野通学長時代（1957年4月～1963年12月）に入り、1963（昭和38）年、創立40周年記念事業の一環として、温山会が三恩人の胸像の復元を計画し、日展評議員で愛媛出身の伊藤五百亀氏に製作を依頼し、温山会が母校に寄付し、11月9日に贈呈式が三恩人の関係者の人々の出席の下、挙行された。『温山会報』第7号に贈呈式の模様が掲載されており、また、三恩人の胸像の設置場所の記事があるので、紹介しておこう。

「母校の創立四十周年を記念する各種行事が三十八年十一月九日の記念式典を中心としてその前後に取り行われた…（記念式典の後）引き続き温山会から母校へ新田温山、加藤拓川、加藤彰廉の創立三恩人の銅像贈呈式が行なわれた。新田温山翁は母校の創立者、加藤拓川翁は当時の松山市長で温山翁にその創立を勧め共に設立に努めた人、加藤彰廉は初代校長で、戦前まではこの三方の銅像が建立されていたが、昭和十八年十一月の金属回収令により供出してなくなったままになっていたので、温山会が四十周年記念事業の一つとして寄付金の一部をこれに当てて復元したもので、銅像は立派に整備された学園の本館前、図書館前、三号館前にそれぞれ磨き上げた美しい花崗岩の台席の上に安置され、前を通る教職員学生たちに温かく微笑みかけている。像は本県西条市出身で東京在住の日展評議員伊藤五百亀氏の力作で数多くの氏の作品の中でも特に秀作と自賛しているものである。贈呈式では新野温山会長が星野学長に謹んで贈呈のことばを述べた。

銅像贈呈式のあと講堂玄関階段にて記念撮影のあと一同校庭に出て除幕式を挙行した。温山翁と加藤先生の像はそれぞれ故人の曾孫とお孫さん

達、拓川翁の像は未亡人の手により厳粛の中に除幕された」¹²⁾

このように、三恩人の胸像は、本館前、図書館前、3号館（1962年竣工）前に設置されたことがわかる。この本館とは1924（大正13）年竣工の本館である。また、図書館前とは、1959（昭和34）年7月竣工の新図書館である（本館の東側に建設。2階建）。

この記事では、三恩人の場所が明示されていないが、おそらく長次郎翁が本館前に、拓川翁が図書館前に、彰廉先生が3号館前に置かれたものと思う。この時の三恩人の胸像の写真は『松山商科大学六十年史（写真編）』115、116、132頁に掲載されている。

そして、この時、三恩人のプロフィールが星野通学長によって書かれた。それは次の如くであった¹³⁾

新田長次郎翁

「温山新田長次郎翁は松山市山西の産。弱冠志をたてて大阪にいで当時至難とされた帯革製造業を創始し日本産業発展に大きい寄与をした。勤労を尚び虚偽を斥けるよきひととなり万人に敬愛されたが、翁また青年を愛し学問を愛し巨費を投じて故山に松山高等商業学校を創設した。温山会は創立四十周年に当り学園創立の父温山翁を偲んで胸像を再建し、永くその功績を後世に伝えんとするものである。

昭和三十八年十一月九日 星野 通撰文

大暁 澤田茂雄謹書」

加藤拓川翁

「拓川加藤恒忠翁は松山藩儒者大原観山の三子であり、俳人子規の叔父

12) 「創立四十周年記念行事盛大に挙行さる」『温山会報』第7号、昭和39年、6～7頁。『五十年史』323頁。

13) 三恩人の星野通学長の紹介文は胸像の裏に書かれている。また、『松山商科大学六十年史（写真編）』115頁に全文が掲げられている。

にあたる。幼にして伝統の家学に親しみ、長じてフランスに学び外務省に入って大公使を歴任後貴族院議員となる。後年請われて松山に帰り市長となったが、松山高等商業学校創立に当っては新田温山翁を説きよく学園誕生の産婆役を果たした。ここに温山会は創立四十周年を迎えるに当り翁を偲んで胸像を再建、永くその功を讃えんとするものである。

昭和三十八年十一月九日 星野 通撰文

大暁 澤田茂雄謹書 』

加藤彰廉先生

「加藤彰廉先生は松山藩士宮城正修の次子として生る。長じて東京大学に学び西欧の新思潮を身につけたが、卒業後は教育界に入り山口高等中学校教諭を経て大阪高等商業学校長となった。晩年松山に帰り北予中学校長となる。松山高等商業学校創立に当っては請われて初代校長となり、学園百年の礎を確立した功績は至大である。ここに創立四十年に当り温山会は胸像を再建、先生の遺徳を永く後世に伝えんとするものである。

昭和三十八年十一月九日 星野 通撰文

大暁 澤田茂雄謹書 』

この星野通の紹介文は三恩人の経歴をそれぞれ180字程度に短くまとめ、簡にして要を得たもので、その後の原型という意味において極めて重要な史料である。しかし、現時点ではいくつか不備・問題点が見受けられる。例えば、三恩人の生年月、没年が無い、また、両加藤には出自があるが、長次郎には無い、さらに彰廉には学歴を記しているが、長次郎と拓川には無い、また、両加藤には衆議院議員の経歴があるのに欠けている、等々である。

創立40周年（1963年）以降、大学は次々と定員を増やし、施設・設備拡大に邁進した。そのため、古い建物を壊した。新本館（現1号館）建設のために、1968年3月に歴史ある本館（1924年竣工）の一部（南側の建物）を取り壊した。そのために、旧本館前にあった長次郎翁の胸像を移転する必要がある、こ

の時に現在の正門前に移設したと考えられる（元、松山大学長神森智先生より聞き取り）。なお、残りの旧本館は新々本館（現本館、1981年1月竣工）のために1979年7月に全部取り壊し、今はない。

また、1959（昭和34）年7月竣工の図書館前にあった拓川翁の胸像は、いつ現在の3号館（1962年竣工）の保健室前に移設されたのか、資料はなく、記憶も薄れ、不明である。『松山商科大学五十年史』が1974（昭和49）年に刊行され、そこに当時の写真が掲載され、図書館前に拓川翁像と思われるものが立っている。この時はまだここに居た。貴重な資料である。なお、この図書館は1993（平成5）年8月の東本館を建設する際に壊したので、それ以前に拓川翁像は3号館前に移転したものと推測される。

このように、長次郎翁は旧本館→正門前に、拓川翁は図書館前→3号館の保健室前に移転された。加藤彰廉先生は銅像が復元されて以降、3号館の310番教室（2017年から学生部が使用）前のままであった。

そして比嘉学長時代の2000（平成12）年12月、三恩人の胸像の周りを生け垣で囲い、綺麗に整備した。

その後、三恩人の胸像の前に、それぞれ簡単なプロフィールが石碑に書かれた。『学生便覧』の「大学紹介」や『学内報』での三恩人の説明文を見ると、2003年4月号までは星野通の撰文であったが、2004年4月号からは新しい撰文となった。それは次の如くなっている。

「三恩人

新田長次郎（温山）翁

安政4年～昭和11年（1857～1936）

松山市山西の出身。20歳にして志をたて大阪に旅立ち10余年の歳月を経て日本初の動力伝導ベルトの製作に着手し、至難とされた皮革製造業の確立を始め、膠・ゼラチン、ベニヤの製造をも手がけるなど、日本産業の発展に多大な貢献をした。

青少年を愛し学問を愛する温山翁は、高等商業学校設立の提案に賛同し、設立に際しては「学校運営には関わらない」ことを条件に、設立資金として巨額の私財を投じ、我が国の私立高等商業学校では第3番目の設置となる松山高等商業学校（本学の前身）を創設した。

本学園では「学園創設の父」としてその功績が今日に伝承されている。

加藤恒忠（拓川）翁

安政6年～大正12年（1859～1923）

松山藩儒学者大原有恒（観山）の三男として生まれ、俳人正岡子規の叔父にあたる。

幼くして儒学に親しみ、フランス留学を経て外務省に入り、外務大臣秘書官、大使・公使を歴任後、衆議院議員・貴族院議員に選任された。

後年、松山市長への就任を要請され、第5代市長となり、北予中学校加藤彰廉校長からの高等商業学校設立の提案に理解を示し、文部省との設置交渉を行うと共に、友人新田長次郎（温山）に設立資金の支援を依頼するなど、設立運動の中心的な推進役として松山高等商業学校創設に多大な貢献をした。

加藤彰廉先生

文久1年～昭和8年（1861～1933）

伊予松山藩士宮城正修の二男として生れ、東京帝国大学文学部（現東京大学）に学び西欧の新思潮を身につけた。卒業後は文部省、大蔵省在任の後教育界に入り、山口高等中学校長を経て大阪高等商業学校長となった。晩年、要請されて北予中学（現県立松山北高等学校）校長に就任し、高等商業学校設立をいち早く加藤恒忠松山市長に提案するなど設立運動に尽力した。

松山高等商業学校創設に際しては、初代校長に就任し、第一回卒業式に

において「真実・忠実・実用」を説いた訓示は校訓「三実主義」に確立され、人間形成の伝統原理として今日に受け継がれている。」¹⁴⁾

この新しいプロフィールは星野通の撰文を元にその不備を補った大変優れたものと思う。しかし、つぶさに見てみると、現時点ではなお若干の問題点が見いだされる。例えば三恩人の出自・学歴がなお不統一であり、人格形成の説明も不十分であり、さらにまた松山高等商業学校提案について両加藤の関係につき史実誤認が見られるのである。以下、失礼を顧みず、私が気づいた問題点を列挙しよう。

新田長次郎について

- ①「松山市山西の出身」とあるが、正確には松山藩温泉郡山西村（現、松山市山西町）とした方がよいだろう。
- ②両加藤の場合は父親の名前が記されているので、長次郎の場合も記した方がよいだろう。ちなみに長次郎の父は喜惣次である。
- ③両加藤の場合は出自が記されているので、長次郎の場合も記した方がよいだろう。ちなみに長次郎は農家出身の次男である。
- ④加藤彰廉の場合は学歴が記されているが、長次郎の場合は記されていない。ちなみに長次郎は寺子屋のみであり、あとは独学である。これも記した方がよい。
- ⑤両加藤の場合は幼年時代・青年時代の人格形成のことが記されているが、長次郎の場合にも記した方がよいだろう。ちなみに、長次郎は、福沢諭吉の『学問ノス、メ』を読み、独立自尊の精神を身につけ、また、世界に雄飛せんとする志を形成した。
- ⑥長次郎は大阪に出て、藤田組、大倉組に勤めて、皮革業を習得し、当時賤業

14) 2004（平成16）年度『学生便覧』。

視されていた皮革業を将来有望な産業とみなし、生涯の職業とすることを決意した。研究熱心であり、堅忍不拔、忍耐力が強く、正直者で人を信じ、嘘をつかず、努力し、成功をおさめ、「発明王」「東洋一のベルト王」と言われるようになったが、その面の強調がやや弱いと思われ、丁寧に記した方がよいだろう。

- ⑦「十余年の歳月を経て日本初の動力伝導ベルトの製作に着手し」とあるが、長次郎が藤田組に入所したのが明治10年で、日本の産業革命のリーディングインダストリーである紡績業の国産の帯革ベルトを製作したのが21年であり、確かに、皮革業従事からみると「10余年」であるが、長次郎が独立したのが明治18年であり、そこを起点にすると僅か3年であり、長次郎の先見性をもっと強調した方がよいだろう。

加藤恒忠（拓川）について

- ①拓川には父親の名前、出自が記されているものの、学歴が記されていない。拓川は司法省法学校に入学したが、同期の原敬らと寄宿舎で賄い事件を起こし校長により放校されたので、記さなかったと思われるが、司法省法学校時代に拓川は人生の大経験をし、人格形成をしたのであり、入学し、学んだ旨はぜひとも記すべきであろう。
- ②拓川は司法省法学校を放校された後、中江兆民先生の塾でフランス語を学び、西洋の自由民権思想・平等思想を学んだ。彰廉の場合に「西欧の新思潮を身につけた」と表現されているので、拓川についても民権思想を学んだ旨を記した方がよい。また、拓川は旧松山藩主の久松定謨とともにフランスに留学しパリ法科大学政治学校に入学し学んだ旨も記した方がよい。
- ③また、拓川が「北予中学校校長加藤彰廉校長からの高等商業学校設立の提案に理解を示し」とあるが、拓川が彰廉に高商設立を働きかけたのであって、逆である。それは、理事の井上要の回想から判明する。

「確か大正十年の冬頃だと記憶している。今の松山高等学校教授の北川淳一郎君が私に話したことがあった。『少なくとも四国の文化文教の中心を松山におき四国大学の基礎を作らうと云ふのには、今の松山高等学校の外に少なくとも高等商業の一つ位は作らなければいけない。夫れを執行しては何うか。若し執行するならば甚だ便宜な方法がある。それは北予中学の上に高等商業課を設けることであり、現在の北予中学の校長は高商の校長として既に経験があり、且つ最も適材である。さうして、教室の増築と数名の専門教師をおけば宜しいので之は必ず成功すると思ふ。教師は高等学校の教授にも援助を依頼すれば宜しい』といふのであった。

然し私は高商はだいぶんの経費なり、資金を要するからその実現は甚だ困難だと考へた。折柄加藤君が松山に帰ったので其話をすると『それは非常な名案だ、なんとかして実行したいもんだ、やらうじゃないか、金は何とかする』と云ふので、金は先づ第二期計画として、取りあへず加藤北中校長に頼んで設計と予算を作ってもらった」¹⁵⁾

この井上の回想の如く、北川淳一郎→井上要→加藤拓川→加藤彰廉の順序で、高商設立話が進んだといえる。

ところで、これまでこのプロフィールに見られる如く、高商設立話について、加藤彰廉→加藤拓川と誤解されてきたのは、実は『松山商科大学三十年史』に原因があると思う。同書の2頁で田中忠夫が「加藤彰廉氏はこの一文（筆者注、北川淳一郎の海南新聞記事）に共鳴して早速北川氏を訪ねて懇談し、是非実現に力を尽くそうということで加藤恒忠氏に相談したのであった」¹⁶⁾と書いていることが原因であり、それが今日まで60年以上にわたり信じられてきたのである。もし、この時田中忠夫が、井上要の『拓川集 追憶編』（昭和8年）の中の一文や『北予中学 松山高商 楽屋ばなし』（昭和

15) 『拓川集 追憶編』昭和8年9月。

16) 『松山商科大学三十年史』（昭和28年）2頁。

8年), 星野通編の『加藤彰廉先生』(昭和12年)をよく読んでおれば間違わなかったのではないかと思う。

- ④また、拓川が「文部省との設置交渉を行なう」とあるが、文部省と交渉したのは彰廉であり、拓川ではないだろう。

加藤彰廉について

- ①加藤彰廉の誕生日は文久元年12月27日で、西暦表示に直すと、1862年1月26日となり、1861年とするは間違いであろう。
- ②彰廉は「東京帝国大学文学部に学び」とあるが、このときは東京帝国大学ではなくて東京大学である。また、「西欧の新思潮を身につけた」とあるが、抽象的であり、もっと具体的に、ジョン・スチュアート・ミルの自由主義経済論、自由貿易論等を身につけたとした方がよいだろう。
- ③「山口高等中学校長を経て」とあるが、山口高等中学校時代は校長ではなく教授であり、次の広島尋常中学では校長である。
- ④北予中学校長であった彰廉が「高等商業学校設立をいちやく加藤恒忠松山市長に提案」とあるが、さきにも述べた如く、これは逆である。また、拓川が彰廉に高商設立を働きかけた時期は松山市長になる前の貴族院議員時代のことである。
- ⑤第一回卒業式で述べた校訓の順番は「実用・忠実・真実」であり、事実誤認である。
- ⑥長次郎を「学園創設の父」と言っているので、彰廉については「学園創設の母」と記した方がよいであろう。

以上を踏まえて、三恩人の新しいプロフィールを試案として掲げておこう。

第2節 創立の三恩人のプロフィール試案

新田長次郎(温山)翁

安政4（1857）年～昭和11（1936）年

本学園三恩人の一人で、伊予松山藩温泉郡山西村（現・松山市山西町）にて、里庄を務めたことのある農家、父喜惣次の次男として生まれる。翁は幼くして父を失い、母を手伝いながら9歳より3年間寺子屋に学び、その後独学で勉強し、『学問ノス、メ』を読み、独立自尊の精神を身につけた。20歳の時大阪に出て、藤田組、大倉組に入り、皮革業を修得し、当時賤業視されていた皮革業を生涯の職業とすることを決意し、1885（明治18）年27歳の時独立して、皮革業を開始し、研究熱心、堅忍不拔、正直者で3年後には国産初の動力伝動ベルトの開発に成功し、日本の紡績業の発展に多大な貢献をし、「東洋のベルト王」と称せられた。また、膠・ゼラチン、ベニヤの製造をも手がけ、日本産業の発展にも寄与した。

青少年を愛し、学問を愛する温山翁は、1911（明治44）年、大阪の貧しい子弟の教育のために私財を投じ、私立有隣尋常小学校を設立。また、1923（大正12）年には親友の加藤恒忠から勧められて、郷土で私立松山高等商業学校設立の提案に賛同し、設立に際しては「学校運営には関わらない」ことを条件に、設立資金として巨額の私財を拠出し、我が国の私立高等商業学校では第3番目の設立となる松山高等商業学校（本学の前身）を創設した。

本学園では「学園創設の父」として、その功績が今日に伝承されている。

加藤恒忠（拓川）翁

安政6（1859）年～大正12（1923）年

本学園三恩人の一人で、伊予松山藩儒学者大原有恒（観山）の3男として生まれ、俳人正岡子規の叔父にあたる。幼くして儒学を学び、1876（明治9）年司法省法学校に入学するが、同期の原敬や陸羯南らと賄い事件を起こし、校長と対立し、放校される。後、中江兆民の仏学塾に学び、自由民権・平等思想を身につけた。1883（明治16）年旧松山藩主・久松定謨の随員でフランスに留学し、パリ法科大学政治学校に入学。

原敬のついで外務省に入り、フランス公使館、外務大臣秘書官、外務省人事課長、ベルギー公使、パリ講和会議の随員、シベリア派遣特命全権大使等を務めた。1921（大正10）年からは国際連盟協会役員として国連平和思想の普及に努めた。また、その間、衆議院議員、貴族院議員も歴任した。晩年の1922（大正11）年5月、食道閉塞の身でありながら、井上要らの強い要請により、松山市長に就任した。また、その間、北予中学校長の加藤彰廉に松山高商設立の提案を行ない、高商設立が危機に陥るや友人新田長次郎翁に設立資金の支援を依頼し、難局を乗り切り、松山高等商業学校設立に多大な貢献をした。

本学園では、新田長次郎と加藤彰廉を結びつけた「産婆役」として、その功績が今日に伝承されている。

加藤彰廉 先生

文久元年12月27日（1862年1月26日）～昭和8（1933）年9月18日

本学園三恩人の一人で、伊予松山藩士宮城正脩の次男として生まれ、東京大学文学部政治学及理財学科を卒業した。大学時代にジョン・スチュアート・ミル等の自由主義経済思想を身につけた。卒業後、文部省、大蔵省に勤めた後、1888（明治21）年教育界に入り、山口高等中学教授、広島尋常中学校長、大阪商業学校長、大阪高等商業学校長等を歴任するなど教育界の長老である。また、衆議院議員も務めた。

後年、加藤恒忠らに要請されて、1916（大正5）年危機にあった北予中学校長に就任し、再建、発展させた。その在任中、加藤恒忠らに要請されて松山高等商業学校の創立に専念し、難局をへて、1923（大正12）年松山高等商業学校を設立し、初代校長に就任した。彰廉校長は温和で、家族主義的、非官僚的な学校運営を行ない、優秀な教員を採用し、学校を発展させた。1926（大正15）年3月8日の第1回卒業式において校訓として「実用・忠実・真実」を宣言した。この「三実主義」は本学の教育方針であり、また人間形成の伝統原理として今日に受け継がれている。

本学園では「学園創設の母」として、その功績が今日に伝承されている。

第3章 校訓「三実主義」について

第1節 校訓「三実主義」の歴史的変遷と問題点

現在松山大学の『学生便覧』において、校訓「三実主義」は次のような説明がなされている。

「松山大学は松山高等商業学校初代校長・加藤彰廉先生が創唱し、第3代校長・田中忠夫先生によりその意義が確認強調された「三実」という教学理念を校訓として掲げています。

90有余年の学園の歴史とともに生きて今日に至った人間形成の伝統原理で、本学あるいは前身の松山高等商業学校、松山経済専門学校、松山商科大学の卒業生が、全国的に高い人間的評価を受けているのは、この校訓の訓化によるところが大きいといえます。

三実とは、「真実」、「実用」、「忠実」の三つの「実」でそれぞれ次のような意味をもっています。

真実 (Truthful)

真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自から真知を求める態度である。

実用 (Useful)

用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを生活の中に生かし、社会に奉仕する積極進取の実践的態度である。

忠実 (Faithful)

人に対するまことである。人のために図っては己を虚しうし、人と交わりを結んでは終生操を変えず、自分の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする態度である。』¹⁷⁾

ところで、この校訓「三実主義」の配列は、松山大学90有余年の歴史の中で4回も変遷している。以下、具体的に考察することになろう。

1) 加藤彰廉校長の校訓「三実」の創唱

加藤彰廉校長（在任：1923年4月～1933年9月）は1926（大正15）年3月8日の第1回卒業式の席上、校訓として「三実」（実用・忠実・真実）を宣言した。

『松山高商新聞』第9号（大正15年4月12日）1面に次のように記載されている。

「去る三月八日第一回卒業式席上に於て、校長は校訓を左の通り宣言せり。

- 一、実用 **Useful**
- 一、忠実 **Faithful**
- 一、真実 **Truthful**

因に右の校訓を要約して三実と呼び又用忠真 U・F・T. とも称し、知徳体なる静的なるに比し用忠真は動的にして、実業界に雄飛すべき本校学生に対する校訓としては誠に麗はしきものと言ふべし」¹⁸⁾

ただし、第1回卒業式の式辞は、現在のところ発見されていないので、彰廉校長がどのように説明したのかは定かでない。しかし、翌1927（昭和2）年

17) 松山大学、2017年度『学生便覧』。

18) 『松山高商新聞』第9号、大正15年4月12日。

3月8日の第2回卒業式で、彰廉校長は校訓「三実主義」について、次のように説明している。

「……終リニ臨ミ諸氏ハワガ校教育ノ要旨ナル三実主義ニ則リ、出デテハ有為多能、適クトシテ可ナラザルナク実用的才幹ヲ發揮シ、己レノ務メニ対シテハ忠実勤勉、誠心誠意以テ人ノ信頼ヲ博シ、入ツテハ益知識ヲ研キ徳ヲ積み、真理ヲ貴トビ、正々堂々俯仰天地ニ恥ヂザル底ノ人物タルノ修業ヲ怠ラザランコトヲ望ム……」¹⁹⁾

しかし、この説明も108字程度で短く、分かりにくいのだが、彰廉校長の校訓「三実主義」は、卒業生と入学生に対する教育方針、人間形成の原理を示したものである。卒業生に対しては、学校で学んだことを実際に役立て有能な人材になること（実用）、仕事に誠実に向かい人の信頼を得ること（忠実）。新入生に対しては、真理を尊び、学問に励むこと（真実）、嘘をつかず、徳を積む（忠実）ことを説いたようである。

そして、その教育方針を、実用→忠実→真実の順番で表した。実用（実際に役立つこと）を最初に持ってきたのは、松山高商が商業経済に関する実業専門学校として設立されたことを念頭においたものと考えられる。

そして、その後、彰廉校長は校訓「三実主義」を入学式、卒業式、記念式典のたびに繰り返し述べられ、また1926（大正15）年9月制定の校歌にも「校訓三実 我が身に体して」「勇猛精進 三実報国」と歌われ、本校に定着していった。

1933（昭和8）年10月に就任した第2代渡部善次郎校長も彰廉校長の校訓「三実主義」を継承し、また、1934（昭和9）年10月に就任した第3代田中忠夫校長も彰廉校長の「墓守」として彰廉校長の校訓「三実主義」を長らく継承

19) 『松山高商新聞』第17号、昭和2年3月28日。

した。

2) 田中忠夫第3代校長の校訓「三実主義」の明文化と順番の変更

田中忠夫校長（在任：1934年10月～1947年2月）が、その在任中の1941（昭和16）年4月、彰廉校長の校訓「三実主義」に対し、その内容の「再確認」と「確定解釈」を施し、同時に「真実」をトップに出して「真実・実用・忠実」の配列順序に変えた。

その事情について、田中忠夫らが執筆した『三十年史』（昭和28年）は次のように述べている。

「昭和十四・五年頃になると、校訓三実主義の内容如何ということがよくやく問題になり始めた。加藤校長逝去後に来任した教員が多くなつたこと、校訓制定以来十五年を経、加藤校長逝去後でも七年を経過して、校訓の再検討を要する時期にもなつたこと、説かれること少く、又書かれること殆どなかつたこの校訓（昭和二年の卒業訓示が現存文献の唯一のものである）は、今にして確定解釈を下して置かないと内容不明になるかも知れないという不安のあること、又時局の要請により、指導方針に新しい要素が次々に加わりつつある現状で、三実主義はどのような位置を占めるべきであるかという実践的必要の加わつたこと。およそ以上のような理由から、学校としての意志表示をすべきであるという意見が教員間に漸次強まって来た。

たまたま昭和十五年の初頭、第十一師団司令部の某少将が、県内の或る公開の席上で、本校の校訓に対する批判らしきものを洩らしたことが、一卒業生によつて田中校長に伝えられた。それは『教育勅語以外に校是・校訓の如き特異のものを作る学校があるが心得難い。師団は幾つあつても一つの軍人勅諭で十分である如く、学校は幾つあつても一つの教育勅語の信奉でもって足る筈でないか』というのである。前述の理由もあり、又直接

にはこれが刺激となつて、田中氏は『校訓三実主義』という一文を草して、昭和十五年度の生徒要覧の巻頭に載せた」²⁰⁾

ここから、判明することは、校訓「三実主義」が提唱されて年月がたち、風化し始めたこと、また、時局の要請を「三実主義」の指導方針のなかに盛り込む必要が出てきたこと、そして、軍の某少将の教育勅語さえあれば、校訓など不要だという意見に反論する必要があったため、田中校長が校訓「三実主義」の精神の「確定解釈」を行ない、さらに徹底、高揚させるために、「昭和十六年度の生徒要覧」に発表したことがわかる。

軍の某少将の校訓不要論に対し、田中校長が校訓「三実主義」を「再確認」し、「真実」を先頭に出し、「三実主義」を「明文化」し、「確定解釈」したのは、軍部への抵抗として評価できる。後に、第6代伊藤恒夫元学長も「『田中確定解釈』、特にその『真実』についての解釈に、正真にあって、私は、感動した」と『温山会報』21号で述べており²¹⁾、また、第7代稲生晴元学長も「松山高商と田中忠夫先生」のなかで、「守りの動機から生まれたものであっても、生まれた文章それ自体は先生の真実の理想である」と高く評価している²²⁾

さて、田中が校訓「三実主義」を「昭和十六年度生徒要覧」に掲載した一文は次の通りである。

「人が生活に一定の信条をもつことは自ずからその生活に風格を与え、信条以外の徳を修める機縁をも供するもので、修徳上極めて有益である。殊に団体にあつては、この信条は時と共に団体の風尚を育て、この風尚は

20) 『三十年史』173～174頁。なお、『三十年史』その他では、「昭和十五年度の生徒要覧」とあるが、正確には「昭和十六年度」の間違いである。『三十年史』の間違いが、その後も長らく続いていると考えられる。「松山高商新聞」第164号、昭和16年4月25日では、「三実の信条を以て薫化せん 聖校長の訓へ明文化さる」と題し、昭和16年度の始業式（4月10日）において田中校長が発表し、生徒要覧に掲載したとある。

21) 伊藤恒夫「三実主義の展開」『温山会報』第21号、昭和53年9月、33頁。

22) 稲生晴「松山高商と田中忠夫先生」松山商科大学『田中忠夫先生』昭和61年、50頁。

自づから団員を薫化して驚くべき陶冶力を發揮するものである。さればわが加藤聖校長も本校の校訓制定については特別の苦心を払われ、本校の創立に先立つてこれを決定されたのであつた。

聖校長御苦慮の要点は、卒業生の置かるべき立場－新時代の実業家という職分と、国民の指導者といふ身分－と、新田温山先生（長次郎氏）の人格－本校創立の動機とその生涯を貫いた生活態度－の二点であり、之を如何に把握し如何に表現するかにあつたといふ。かくて成れるわが三実の訓へは同時に聖校長の人格の縮図でもあり、三十年に亘る尊とい教育体験の結晶でもあつたのである。

真実－とは真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自から真知を求め、伝統的陋習を一擲して潔よく真理に殉ぜんとする態度のことである。換言すれば旺盛なる『科学する心』に外ならない。

実用－とは用に対するまことである。広い意味では真理を真理のままに終らせないで、必ず之を生活の中に生かさんとする積極進取の実践的態度である。最近叫ばれつつある日本的真理研究の運動も、日本的用を重しとする清新な実用主義であるといふてよいが、本校のそれは、さらに一步を進めて自己の職域に対する用を求めんとするもので、最も切実旺盛な実践的態度である。

忠実－とは人に対するまことである。人のために図つては己を虚うし、人と交わりを結んでは終生操を変えず、自己の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする重厚な態度のことである。かくて深く人を信ずると共に、人をして深く己を信ぜしめ、信を以て人と人を結ばんとする清き温かき情誼の精神である。

これを要するに、一つには客観的真理を自己の職域における実用面に即して探究し、この結果をその職域に生かしてまことをつくすと共に、二つにはその探求実践の母胎たる社会の結合を、人と人との信をもつて鞏固に

し、かくて社会的努力の成果を、全体として強大ならしめんとすることが本校の三実主義なのである。

而うしてこの真と用と人との三者に対して一つのまこと－実を貫くことが、実にわが三実主義の要諦なのである」²³⁾

この田中の一文は加藤初代校長の「墓守」人だけあって、加藤校長の「教え」を受け継ぎ、よく考えられて、簡単であった「三実主義」の定義を「明文化」したもので（428字）、高く評価されよう。

しかし、時は戦時下である。総力戦体制下である。この「三実主義」の田中の解釈には全体主義の指導精神が色濃く盛り込まれている。それは初代校長の加藤彰廉が使用しなかった、すぐれて日本的な言葉である「まこと」という概念を使用したことである。この点をするどく指摘したのが、服部寛氏の「学内報」の論考であった²⁴⁾

時代は、日中全面戦争からアジア太平洋戦争の時代である。1940（昭和15）年10月には大政翼賛会が発足する。「まこと」というのは大政翼賛会発足時に頻繁に使われた言葉である。近衛首相は10月12日の大政翼賛会発会式の挨拶で、「わが大政翼賛の運動こそは、古き自由放任の姿を捨てて、新しき国家奉仕の態勢を整えんとするものであります。…各位はこの重大なる使命達成のため、挺身これに当られ、大御心を安んじ奉り、忠誠の実を挙げられんことを切望してやまざる次第であります。…（本運動の綱領は）大政翼賛の臣道実践ということであり、上御一人に対し奉り、日夜それぞれの立場において奉公の誠をいたすということに尽きると存するのであります」²⁵⁾と述べていた。12月14日の「大政翼賛会実践要綱」では「一、臣道の実践に挺身す。すなわち、無上絶対普遍的真理の顕現たる国体を信仰し、歴代詔勅を奉体し、職分奉公の

23) 『三十年史』174～175頁。

24) 服部寛「田中忠夫と三実主義についての一試論(1)(2)(3・完)」松山大学『学内報』第430号、431号、432号、2012年10月、11月、12月。

25) 歴史学研究会編『日本史資料 5 現代』岩波書店、1997年、93頁。

誠をいたし、ひたすら惟神の大道を顕揚す」²⁶⁾とある。当然、田中もこの大政翼賛会発足時に使われた「忠誠の実」「奉公の誠」「職分奉公の誠」「無上絶対普遍的真理」という言葉を十分認識していたと思う。それで、1941（昭和16）年4月の三実主義の「明文化」・田中の解釈のなかに、ひらがなで「まこと」をいれたのではないだろうか。

そこで、私は、この田中の1941（昭和16）年の校訓「三実主義」の解釈・配列を、加藤彰廉の校訓「三実主義」（「戦前三実主義」と名づく）と区別するために、「戦時三実主義」と名づけている。

なお、『三十年史』において、田中らは「残念ながら戦時体制より来る指導精神の新要素が次々に重課されて、そのため校訓成熟の機がなかったというのが実状である」²⁷⁾と反省の弁を述べているが、私は、戦時下の学園の実態は「校訓成熟の機がなかった」というよりも、むしろ、服部氏が指摘するごとく、三実主義の形式的性格、無規定性のために、戦時期には体制にとっての実用、体制にとっての忠実、体制にとっての真実という方向に転変されたものと思う²⁸⁾。実用は「職分奉公のまこと」に、忠実は「忠誠のまこと」に、真実も「日本的真理のまこと」に、加藤校長時代の「戦前三実主義」を「戦時三実主義」に転変させ、学生、教職員を「大東亜共栄圏の建設」のための戦争体制へと駆り立てていったのが真実でないかと思う。

1937（昭和12）年の近衛内閣下に日中戦争がはじまり、翌38年には国家総動員法が制定され、1940年には大政翼賛会が作られ、戦争のために社会のあらゆる面に統制が徹底され、学園でも管理統制が進んでいった。『三十年史』によると、1940年初夏の校長会議で、文部省は学校活動の全領域－特に校友会活動を訓育指導の場と考え、厳しく指導すべきで、従来 of 如く生徒の自由にまかすべきでない旨を指示してきたが、12月に入って、ついに自由主義的校友

26) 同、94頁。

27) 『三十年史』175頁。

28) 服部寛氏の指摘。

会を解散し、報国団を結成するよう指示してきた。その結果、12月16日に校友会が解散され、報国団の結成がなされた。1941年に入ると、戦時体制がさらに強化されて、学園の学徒の生活は全く軍隊的となっていた。修養や訓育は軍隊式訓練となった。精神面から滅私奉公、一億一心、尽忠報国、挙国一致、大政翼賛等の勅語、詔書が機会あるごとに奉読させられた。軍事教練が強化され、野外演習、実弾射撃訓練、兵営での宿泊訓練等が行なわれた。学生たちは勉強の機会を奪われ、勤労作業や軍需工場に動員された。また、卒業式の繰り上げも行なわれ、戦場に動員された。そして、戦争に批判的なマルクス学派の住谷悦治教授（1942年7月）や自由主義者の古川洋三教授（1944年11月）が退職させられ、学園は兩人を守ることができなかった²⁹⁾。1944年4月からは校名も経済専門学校に変更させられた。授業も殆どなくなった。軍国主義・全体主義一色になったわけである。自由のないところに真理の探究の場は無いし、人に対するまことの精神も無い。

1943（昭和18）年5月15日、田中忠夫校長時代に松山高商創立20周年の祝典が行なわれた。田中校長は式辞で、高商の発展ぶり―定員を当初の150名から昭和16年には600名に増やしたこと、大東亜共栄圏建設という国策に協力して「支那語科」を特設したことなどを報告し、教育方針としての校訓「三実主義」について次のように述べている。

「教育ノ方針トシテハ三実主義―実用、眞実、忠実ニ特ニカヲ注イデ参リマシタ。実用トハ日本の用職域的用ニ対スルまことデアリ眞実トハ真理ニ対スルまことデアリ忠実トハ人トノ交リニ於ケルまことデアリマス。蓋シ此ノ三実ノ備ハルトキ外見ハ如何ニアリマセウトモ国益ニ役立チ、職域奉公ノ誠ニ欠ゲズ、社会生活ニ大過ナキヲ得ルトノ趣意カラデアリマス…

29) 『三十年史』176～181頁、年譜6～7頁など。また、戦時下の田中校長時代の学園については、稲生「前掲論文」49～58頁、拙著『松山高商・経専の歴史と三人の校長―加藤彰廉・渡部善次郎・田中忠夫』愛媛新聞サービスセンター、2017年、参照。

唯我々ノ希望ハ本校ノ卒業生デアリ現在ノ学生デアリマス。幸ニ学生ノ修学態度ニヤ、満足スベキモノガアリ、卒業生ノ国家ヘノ御奉公ニ聊カ期待ニ副ウ所ノアリマスコトハ私共ノ私カニ意ヲ強ウスルニ足ルモノデアリマス。…私共ハ今程高等商業学校ノ重要性ヲ痛感シテ居ル時ハアリマセン。従ツテ今コソ挺身職域奉公ノ誠ヲ致スベキ時デアルト覚悟致シテ居ルノデアリマス」³⁰⁾

ここでは、「三実主義」の配列が2年前のときの田中の「確定解釈」と異なり、「実用」がトップにきて、その解釈が、「日本的用職域的用ニ対スルまこと」となり、完全に「国益ニ役立」「職域奉公ノ誠」「挺身職域奉公ノ誠」の精神に転変されてしまった。戦時下、真実の探究も人への誠＝忠実も無い。ひたすら戦争への奉公、それが「実用」であった。田中校長は「三実主義」の「明文化」を行ない、「再確認」「確定解釈」をしたが、実際には、時代の流れ・全体主義に迎合し、「戦時三実主義」に転変させたといえる。

戦時下、学園の戦争責任は当然ある。戦後、田中校長が教員適格審査結果、不適格と認定され、1947（昭和22）年GHQにより公職・教職追放され、同年2月退職したのは蓋し当然、ないしやむを得ないであろう（ただし、その後1951（昭和26）年4月に田中は追放解除となり、教授として商大に復職し、1958（昭和33）年3月に退職した）³¹⁾

3) 星野通学長の校訓「三実主義」の再興・再吟味・再認識

松山経済専門学校は、1949（昭和24）年4月に松山商科大学となり、初代学長には伊藤秀夫が就任した（在任：1949年4月～1957年3月）。そして2代目学長には星野通が就任した（在任：1957年4月～1963年12月）。管見の限

30) 「松山高商新聞」第177号、昭和18年9月18日1面、20周年記念式典の式辞より。

31) 松山商科大学『田中忠夫先生』昭和61年、年譜336頁。稻生晴元学長は前掲論文の中で、「(田中)先生もまた一種の戦争犠牲者というべきであろうか」と述べているが(62頁)、戦時中の田中校長の式辞をみる限り、「犠牲者」というよりも、時局迎合者であろう。

りでは、伊藤学長の時代には、校訓「三実主義」についてはほとんど語られず、星野学長時代になって、校訓「三実主義」の再興・再吟味・再認識がなされ、そして、配列の順序を「真実・忠実・実用」に変更した。

星野通の「第二代学長に就任して」の挨拶文は次の通りである。

「大学の主目的は研究の強化，教育の充実，そして育成した人物をして各各その所を得しむること，この三点にある。もとより，地方の渺たる一私立大学であり，理想実現にはかぎりない経済上その他の困難がともなうであろうが，何とか障碍を克服して目的実現に進みたい。…次に学生徳育の目標として，改めて伝統の三実主義を諸君とともに再認識したいと思う。校歌にもうたわれる三実であるが，最近の学生には案外その真精神をよく知らないものが多いらしく，きざな表現であるが学園の行く手を照らすこの炬火も今や忘却の彼方に薄れ去ろうとしていると感じられる。だがこの平凡な三実のスローガンこそは永く学園精神生活の支柱となるべき不滅の実践道徳的原理ではないだろうか。初代高商校長加藤彰廉先生によって創唱され，三代田中校長になつて一段とその尊重さるべき所以がベートネンされた，この真実，忠実，実用の三実原則は少なくとも近年にいたるまで学園人の心の糧となつて，多数の人材を輩出する因素となった。真実とは常に真理を追究して心中確固たる信念を把持すること，また忠実は人と交つて，終生節操を忘れないことであり，また実用とは自己職域を通じて国家社会に奉仕する有能な人材となることである。わが学園出身者の多くが一般に，信念固き人間，信用のおける人間，有能な人間として社会各方面で評価され信頼されているのは三十年の風雪に耐へ生命を保て来たこの三実精神という生活指標の薫化によるものと大言して敢て過言ではないだろう。

私はいま改めて，諸君とともにこの三実原理を再吟味し再認識して，向後の学園人の守るべき第一道徳原理とすることを提唱したいと思うのであ

る」³²⁾

星野学長がなぜ田中忠夫の校訓「三実主義」(真実・実用・忠実)の順序を変え、「真実・忠実・実用」にしたのかの理由を一切述べていないので、不明であるが、この星野の順序・配列がその後の歴代学長に受け入れられ、引き継がれていったことは間違いないだろう。

ここからは、私の仮説であるが、田中忠夫が公職・教職追放され、その後任に伊藤秀夫が松山経済専門学校長に就任し(1947年2月～1951年3月)、その時代に新憲法に基づく「教育基本法」「学校教育法」が制定され、伊藤校長時代の1948(昭和23)年7月に「学校教育法」に基づき、松山経済専門学校を松山商科大学に昇格申請を行なったこと、1949年2月21日に文部省より認可を受けたこと、この大学昇格委員会の委員長は星野通教授であったこと、そして、その「学校教育法」の第52条(当時)には「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と規定していたことが背景にあると思う。

すなわち、新制大学の目的は専門的教育と並んで一般教育を重視し、市民としての人生観、世界観を養成する人間教育をはかることである。旧制大学の如き国家のための研究や人材養成ではなく、戦後民主主義の下、個人の価値をたつとび、自主精神にみちた真理と正義を愛する健全な市民を育成することであった。伊藤学長、星野教授らは戦後の新制大学の理念・特徴を十二分に認識していた。とりわけ、伊藤秀夫新学長は、大学の使命として人間育成をことのほか重視していた。この点は、内田勝敏「回想・松山高商の恩師(四)－伊藤秀夫先生－」が特に強調しているところである³³⁾。

32) 星野通「第二代学長に就任して」『松山商大新聞』第74号1面、昭和32年5月27日。

33) 内田勝敏「回想・松山高商の恩師(四)－伊藤秀夫先生－」『温山会報』第53号、平成23年1月。

以上のような、軍国主義・全体主義から平和主義・民主主義の新日本への転換という戦後の大きな歴史の流れがあって、星野通学長が第2代学長に就任した1957（昭和32）年、戦前・戦時の校訓「三実主義」に代わる、新しい戦後民主主義の理念の下での、校訓「三実主義」を再吟味し、順序を「真実・忠実・実用」に変えたのではないだろうか―ただし本人たちは黙して語らないが―。そこで、私は星野通学長の校訓「三実主義」（真実・忠実・実用）を「戦後三実主義」と名づけておくことにしたい。

もちろん、この星野学長の「戦後三実主義」にも限界があった。それは、田中校長時代（とりわけ、アジア太平洋戦争期）の「戦時三実主義」の深刻な反省の上に立って、戦後民主主義の理念の下で、意識的に「再吟味」し、「再認識」したものではなかったからである。

そして、『学生便覧』に校訓「三実主義」（真実・忠実・実用）が掲げられ、その説明がなされるようになったのは、かなりおくれた1962（昭和37）年度（星野学長時代）からである。

1962（昭和37）年度の『学生便覧』から次のように記され始めた。

「本学には初代高商校長加藤先生が創唱し、二代（筆者注：三代の間違い）田中校長により、その意義が確認強調された三実主義という校訓がある。四十年間学園とともに生きて今日に至った人間形成の伝統的原理であって、本学或は前身の高商・経専の卒業者が中央に地方に高い人間的評価を受けているのは、この校訓の薫化による処が多い。三実とは真実、忠実、実用の三つであって、その意義は次の如く解明されるであろう。

真実とは 真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自から真知を求める態度である。

忠実とは 人に対するまことである。人のために図っては己を虚しうし、人と交わりを結んでは終生操を変えず自分の言行に対し

てはどこまでも責任をとらんとする態度である。

実用とは 用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを生活の中に生かし社会に奉仕する積極進取の実践的態度である」³⁴⁾

この星野学長の説明は、1941（昭和16）年の『生徒要覧』における田中忠夫の「三実主義」の定義・説明の前半部分をそれぞれ2行程度に簡略・簡明化したものである（字数にして215字）。本来ならば、戦後民主主義の立場から、表現・内容を民主的・現代的に変更する必要があったと思われるが、星野学長はしておらず、田中忠夫の定義の単なる簡略・簡明化に過ぎなかった。ここに星野の限界が見受けられるのである。

そして、この星野学長の簡略・簡明化した校訓「三実主義」の配列・定義が、以後、増岡、八木、太田、伊藤、稻生、越智、神森、宮崎、比嘉、青野、神森の各学長時代まで50年以上にわたり、卒業式、入学式で繰り返し述べられ、『学生便覧』、ホームページ等で繰り返し掲載された。

4) 森本三義学長の校訓「三実主義」の順序の変更

ところが、森本三義学長時代（2007年～2012年）の2011年4月から、校訓「三実主義」の順序について、「忠実」を最後にまわし「真実・実用・忠実」に変えた。その理由については、安田俊一副学長（当時）が「『校訓三実』と『3つの方針』」という文書の中で次のように述べている。

「これまで慣習的に『真実・忠実・実用』と言い表されてきた『三実』の順序を『真実・実用・忠実』と確定しました。もともと加藤初代校長による『校訓三実』の提唱と田中三代校長による解説では『真実・実用・忠実』

34) 1962（昭和37）年度の『学生便覧』。

となっており、田中校長はその順序で自然に説明を行っており、そこで、元々の形に戻したうえで、各項目に解説を加えました。その際、田中校長の説明に従って『真実』『実用』は学びの態度、『忠実』は人としてのあり方としてまとめました」³⁵⁾

この文書で校訓「三実」の順序を「元々の形に戻した」とあるが、加藤彰廉初代校長の「三実主義」の順序は「実用・忠実・真実」であり、田中忠夫3代校長の「三実主義」の順序は「真実・実用・忠実」であり、両者が同じでないことは、既に述べた通りで、この文書は史実誤認である。また、その説明は、星野通が1962（昭和37）年に2行程度に簡略・簡明化したものの再現で、新しい解釈ではない。

以上、森本学長時代に星野学長以来の「戦後三実主義」の順序を変えたのは、事実誤認であり、もとに戻す必要があろう。

第2節 校訓「三実主義」試案

以下、校訓「三実主義」の定義について、星野通の簡略・簡明化を元に、古風な表現を現代風の表現に変更し、且つ戦後民主主義の精神が盛り込まれた新しい定義の試案を示しておきたい。

真実とは 真理に対するまことである。皮相な現象に惑うことなく、進んでその奥に真理を探究し、既成知識に満足することなく、批判的精神のもと、自から主体的に考え、確固たる信念をつちかう態度である。言い換えれば、真理と正義を探究せんとする旺盛な科学する心である。

忠実とは 人に対するまことである。人のために図っては誠実な態度を取り、人と交わりを結んでは礼節・節操を変えず、自分の言行に対

35) 安田俊一「『校訓三実』と『3つの方針』」『学内報』421号、2012年1月1日。

してはどこまでも責任をとらんとする重厚な態度である。言い換えれば、人を信じ、人に信頼される人間性尊重の生き方である。

実用とは 用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを仕事と生活の中に生かし、社会に奉仕する積極進取の実践的態度である。言い換えれば、平和で民主的な社会に役立つ誠実で有能な人とならんとする生き方である。

最後に、戦後民主主義下の校訓「三実主義」の生命＝教育理念とは何か。それは、学問の自由の下、真理と正義を探究し、確固とした信念のある人間を育成することであり、人に対しては、個人を尊び、人を信じ、人に信頼される誠実で民主的な、責任ある人間を育成することであり、仕事に対しては、大学で学んだことを生活と職場に生かすことができる、誠実で有能な人間を育成することであると思う。

そして、校訓「三実主義」の真髄は、題目を唱えるだけでなく、なによりも実生活・仕事の中で実行することであろう－教職員の場合は自分の職場のなかで－。

- (付記) 1. 本稿の第3章は、拙稿「新田長次郎、校訓三実主義についての一考察」(『松山大学創立90周年記念論文集』2013年10月)の第2章「校訓三実主義について」をもとに改訂したものである。
2. 本稿の作成にあたり、元松山大学学長の神森智先生より、種々御教示を頂いた。また元教学担当理事の宍戸邦彦先生(現監事)よりも種々御指摘を頂いた。感謝申し上げます。